

別冊・おなご



37号

2021.2



セキさんはネ ホントに
背の高いからイツとすたんでナ
見れば顔又な

いつもニコニコでナ
エいや味言われでも

その場でおさめでナ
えっつも こんど

ほうほうと燃やすて
眼めらめらとすてる人たったいモ

煙りはりてなく
息子征して

息子に戦死れて
泣いてるんじゃないか

子と心にも
さきそうの思っただった

へ小原昭さん



「牛や犬の死んだようにしたくねえと思って、ながい間に
少しづつためた金で墓石つくってやったす、オレ死ねば、
戦死した千三を思い出してくれる人もなく、忘れまられて
しまふべと思って、人通りの多い道のそばさ建でだす」
と、七十三歳になる母親の高橋セキさんは言うのだった。

（小原徳志著『百ころに語る母たち』未来社刊より）

別冊・おなご 37号 目次

セキさんのことば

心……………渡邊眞吾 1

フキノトウ……………高橋つか子 5

仙崎港に引き上げてきた(聞き書き) 山下堅一朗(八十九歳) 山口県萩市……………松本由美子 8

母の手紙 帰帆場は母の居る私の原風景……………渡邊満子 20

ピースボート「オセアニア・クルージング」で出会った人々のこと……………佐藤恵美 24

“エール” 平和と希望……………佐藤弘子 32

感謝の45年……………宮崎順子 39

一等賞・朗読・命・届かぬ年賀状……………多田テル 43

犬と暮らす

千葉ちた江 53

生業なりわいとは

高橋哲子 57

蟻の兵隊の映画を観て

兒玉智江 66

伊藤京助翁の墓

千葉ちた江 68

小平玲子さんを偲んで

高橋つか子 74

小平玲子さんに学ぶ意思の貫き方

田村和子 76

囲炉裏ひびと

小原麗子 79

あとがき

千葉ちた江 80

私たちは国民学校の高学年

金七郎は鉄砲より小さいと

あの金七郎は鉄砲投げんべが

長い袖切れを持って内陣戦ごっこ

表紙 兒玉智江・カット 小原麗子

心別冊・おなご・37号・目次

セキさんのことば

心

ぶらぶら

ラッキントウ

困り真

渡邊 眞吾

小平無千ちいゴ学ん意思の真ち衣
母の手紙、母の思は母の思る私の原風景

私たちが子どもだった時 戦争があった

第二次世界大戦

日本では大東亜戦争と呼んで

東洋平和のための戦争と教えられた

侵略戦争だった

当時 二十歳になると

男は徴兵検査を受ける義務があった

美瑠 辰王晋五・次ノ渡邊眞吾

千葉さつき 08

高橋つか子 5

小泉麗子 07

松本由美子 8

田村咲子 07

渡邊清子 20

高橋ゆかり 17

佐藤恵美 24

千葉さつき 08

佐藤弘子 32

辰王晋五 00

宮崎順子 39

高橋昔子 78

多田テル 43

千葉さつき 08

甲・乙は合格で即入隊

丙・丁・戊は不合格で

兵隊に行けない若者は泣いていた

集落に金七郎と呼ばれる人が居て

小さい体で、青い顔をして

いつもおだやかに笑いながら

薪割りや草取りをしていた

ある日、小さな集落にニュースが走った

五尺足らずで丙種の金七郎に召集がきたど

赤紙が きたど

大人たちがヒソヒソ話をしていた

私たちは国民学校の高学年

金七郎は鉄砲より小さいど

あの金七郎は鉄砲担げんべが

長い棒切れを持って肉弾戦ごっこ



鉄砲を持つ金七郎の真似をしながら

ヨタヨタ行進を繰り返し

みんなで馬鹿にしあざわらった

(あの頃、子供心と言え多くの人を嘲笑したことは許されない)

今年も暑い日が終わり みぞれ 霽の季節が来る

金七郎は征ってからどうなったのだろう

戦死したのか 還ったのか

住んでいたところは空き地になり

廃車置き場になっている

戦争が終わって七十五年経っても

木枯らしに交じって

やぶれた軍靴を引き摺り しろみ 虱を土産に

還ってくる金七郎の気配

亡霊の背後から

フキノトウ

高橋つか子

春の彼岸も過ぎてやわらかい風の日、私は散歩に出た。

義母が生前お世話になったちいさんの家の前を通ったとき、一声かけようと寄ってみた。玄関は閉じている。どこかに出かけていたのなら安心だけど、もしとじこもっているとしたら心配になる。静かな庭先にフキノトウだけが、何か言いたそうに顔を出していた。

ちいさんは一年前に、還暦を迎えた一人息子を病で亡くしている。心の窓を閉じたくなるほどの悲しみの

毎日だと思う。

今年の秋は、少し離れた畑で息子と一緒に育てていた野菜を、三輪自転車で運んでいる姿を目にした。思いがいつぱいつまった野菜だったにちがいない。胸が痛んだ。

冬に入り雪が降り始めたころ、家の前を通った際、従姉妹たちが来て手伝っている様子だった。一人じゃないからほっとした。それから三カ月くらい会っていない。

義母が元気だったころ、三百メートルほど離れているちいさんの家まで、話しつつ友だちにして出かけていた。ちいさんは義母より十歳も下だと聞いている。

あるとき、わたしが職場から帰ってくると、和紙に包んだ淡い色のもち菓子がテーブルにあった。菊の花やフキノトウの形をした手の込んだお菓子、たぶんちいさんの息子さんが作ったものだなあと、思いながら頂いた。

夕食時に義母は、うれしいことがあったと話し出した。

「丁度、息子さんがいてお菓子づくり大会で上位に入り、賞状と副賞を飾っているところだった。たいしたもんだなあ」

と、誉めていた。

息子さんは手先が器用で物づくりに興味を持ち、料理の方も勉強していると聞いた。

その後、街の和菓子屋さんで腕を磨き、菓子職人として働いていた。

五十代の半ばごろから体の調子が良くなかったのか、家で休んでいるようだった。天気の良い日は、親子で野菜畑の手入れをしている姿を見かけた。

そのころ義母は骨粗鬆症と診断を受け、あまり外に出ない。九十代に入ってからベッドでのくらしになった。ちいさんは症状を知ってから、義母へ若いときの話を持ってきて元気づけてくれた。

昭和二十年代後半の話がはじまる。二人は女手一つで子育てをしながら、大きい農家の日雇いで生計を立てていた。

当時、農家の仕事は全部手作業だった。田植えの時期になると、人伝に「集落の〇〇さん宅で苗を運んだ

り、植えたりする人たちを募っているそうだ」と、広がる。近くのお母さんたちや隣の集落からも見えて、二十数人は集まったという。まるで田植え大会のようだった。朝早くから夕方暗くなるまで働く。腰は痛くなり脚は棒のようになつて感覚がわからなくなる。でも必死だったなあと、懐かしく語り合っていた。部屋から二人の笑う声が響いてくると、私まで温かい気持ちになった。義母にとってちいさんは妹のような、かけがえのない苦楽の友に感じた。

私もちいさんからお世話になっている。家の前に十畳ほどの畑がある。義母が元気なとき、いろいろな野菜を育てていた。そこへ私が職場を辞めてからトマト、ピーマン、ナス、キュウリの苗を、見よう見まねで二、三本ずつ植えている。道路沿いなので、ちいさんが用事で通つたりすると、畑に入ってきて伸び放題になっている芽かきや蔓のはわせ方を教えてくれた。支柱を頼りに伸びていく若い芽と蔓。暑くなつてくると畑の手入れは朝とか夕方になる。トマトが熟れて赤くなると眺めているだけでうれしくなる。キュウリ、ピーマン

の形は不揃いだけど、もぎたてはみずみずしくておいしかった。ちいさんのアトバイスで野菜たちは、すくすく育ってくれた。

もうすぐ四月、野菜の苗を植える楽しみが待ち遠しい。二十一年の春の語は、二人の支手一

のたくさんお世話になってきたちいさんへ、一声かけたくて……。

陽を浴びて並んでいる庭先のフキノトウ、息子さんの手づくりお菓子を思い出した。お茶と一緒に頂いたもち菓子、あの頃はみんな元気だった。日、

フキノトウは伝えるように、励ますように光ってる。あつ、出かけていたのかなあ、靴の音がする。

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……



せんなき(ころ)

仙崎港に引き揚げて来た(聞き書き) 山下堅一郎(八十九歳)・山口県萩市

松本由美子

父は朝鮮の京城、今の韓国、ソウルで生まれました。
。母親は父が二歳の時に、兄と父親は昭和十六年に相
次いで病死。お父さんが亡くなって、散髪屋の後を継
いだのは姉の夫、勇次郎さんでしたが、昭和十九年四
月に出征。ひとり息子のター坊は、生まれてまだ四カ
月でした。

十九歳だったお姉さんが、職人さんの世話や店の切
り盛りをしていたのだそうです。

私が朝鮮からの引き揚げの話をお父さんに聞いても、なか
な話してくれませんでした。三年前の夏のことです。

「子どもの頃のこと聞かせて」と言ったら、古い写真
を見ながら、ポツポツ記憶をたどるように話してくれ
ました。南大門小学校に通っていたことや、同級生と
三越デパートのエスカレーターで遊んでいて叱られた
ことなどを。住んでいた家の間取りまで絵に描いてく
れました。

そして、父の大事なもう一つのもの。当時住んでい
た京城の地図のコピーを見せてくれました。

私は「太平洋通り」という、日本の地名をそこに見つ
けた時、ああ、ここは日本の植民地だったのだと思っ
ました。ここに父は生まれ、十四歳で引き揚げるまで

暮らしていたのでした。

1 八月十五日

京城の家から農業高校に通うたのお。二年生の八月十五日の終戦まで。わしゃあ、十四じゃった。夏休みで学校には行かだった（行かなかった）けえのう。一学期だけ行つて。

玉音放送聞きたいね。散髪屋の二軒隣の雑貨屋のラジオで。そこは朝鮮の人が店やつとちやつたいね。へえから（それから）学校から召集かかつて。「集まれえ！」言われて。

先生が、「皆これで撤退せにやあ」言うて。農業学校の証明書はもうた。日本に帰つて、日本の学校に編入できるんじやつて。

へやけど（そうだけど）、すぐに帰りやあせんけえのう。いつ帰れるやら、いつ命令が出るやら分からんから。

リュックサックに非常食や何かを入れて、日にちが経つたら入れ替えたり、いつでも出られるようにしよつたわけ。位牌も。親父とおふくろと兄貴のと。

そういやあ（そう言えば）、「引き揚げ証明書」をもらいに姉ちゃんど役場じゃつたかに行つたあ。

ああ、連絡船に乗る許可書いね。アメリカの司令官の許可書。

そんな時いね、今の北朝鮮の元山げんざんから歩いて来たつちゆう女の子に会うたいね。母親の方は男の服着とちやつて、ふたりとも顔とか真つ黒にしてのう。……、帰えつちやたかねえ。

2 兄・城一さんと形見のカメラと写真ブック
兄ちゃんの写真ブックのことかあ？

ああ、いよいよ帰る頃やのう。姉ちゃんが抱えての

う、「えらい重たあねえ」ちゆうてから、リュックをひっくり返しちやったんじゃあ。ほしたら（そしたら）死んだ兄貴のカメラと写真ブック入れとつたんがバレてのう。

「ター坊のオムツやら、食べもんやら入れるんが先じやあ。そねえな（そんな）もん、江崎の叔父さんとこへ、行李で送りやあええ」ちゆうて怒られての。

「ほやけど（だけど）、とうとう来ん（江崎には届かん）じゃった。」

あれが、いまだに忘れやあせんけえ。あれに皆想い出が詰まっとつたいのう。

やさしい兄貴じゃったあ。京城のあっちこっち連れてつてもろうたんは憶えとる。

兄貴とわしは十二違うから。大正八年の頃じゃろう生まれたんは。

写真ブックにやあ、色んなん。隣近所の人とか、家

族のとか。皆、兄貴が撮った。ちに乘るかで運命が決

昔の写真機じゃけえ。蛇腹をズーと引つ込めて、た

ためるヤツ。皆リュックサツクの底に入れとつたんじ

や。そりやあ兄貴のもんは形見じゃけえ。

ああ、仕事かあ？

善隣商業を四年出て、親父の散髪屋の手伝いしよつ

た。

兄貴が「いろは食堂」。道路の幅が広いからのう、

十何メートル。道路を挟んで向う側に路地があるんじ

やが。その入口の所に「いろは食堂」いうんがあつた

。そこのお姉ちゃんど、どうも仲がよかつたような風

での。それへ兄ちゃんが、わしを連れて行くんじや。

「うどん食べに行こう」言うて。うん、行つてからご

つそう（御馳走）になりよつた。

3 引き揚げ

十一月になつてからじゃのう。終戦から二ヶ月経つとつたけえ。

うん。義兄さんは出征しとろう？へけえ（だから）、三人で引き揚げて来た。

「至急、集まれ！」ちゆうての。「二丁目のところにトラックが三台来とるから急げ！それ、乗れ！」ちゆうのいね（言うのよ）。

当時、区長が言うて回つたのいね。大急ぎいね。荷物か？わしやリュック背負うて、トランク持つて。ほいで（それで）、水筒をはすかに、こう（両方）掛けてのう。姉ちゃんもター坊が居ろう？負うて、ハア荷物持つとつたろうて（持っていたんだらうね）。

へえで（それから）、リョウさん龍山までトラックで移動した

んじゃ。

龍山駅から貨車に乗り換えて、その貨車がやれんどのう（やっかいでね）。

たいでん太田を通つて。後で聞いたんじゃが、たいきやう大邱ちゆう所で停車してな。「しよんべんやら何やらしいもんは、せい！」ちゆうて。

貨車の中は、しよんべんして臭うてやれんのじゃあ。子どもも一緒やけえのう。

一時間くらいして、また動き出して。普段なら急行で、ひてい（一日）くらいで、がさん釜山まで来るんじゃが、二、三日くらいかかったらうか？

へえで、釜山の宿舎が、また大変じゃ。坂を上つた所にあるお寺での。三日くらい居つたかな？

連絡船が今度来るまで待たにやならんけえ。三日間ひもじいてのう。

丸一日、水を飲むだけ。手洗いに行つてから、水飲

んで腹膨らした。

「食べもんがありやあ金出して……。金もありやあせんのじゃけえ。」

主にター坊に食われて。こつちは残り物をもううて食べるくらい。

「ひもじゅうてやれんけえ、寺を出てのお。どつか柿や何か成つとりやあせんかと思うてウロウロしたが、とうとう、よう食われんかった。終いには迷うてのう。」

何とか寺に帰ると姉ちゃんに怒られた。

「配給があつたのに。取りに行つてもらはやあええのう思うても、おまえ居らんから」ちゆうて。

「ついで、問題は連絡船いねえ（だよね）。」

4 興安丸こうあんまるで仙崎港へ

連絡船が二隻、一日交替に釜山港に着くんじゃが、

興安丸（※1）に乗ったら仙崎へ着く。金剛丸こんこうまるに乗

ったら九州の福岡の博多。どつちに乗るかで運命が決まったでう。その日、どつちへ乗るんかなあ？と

思った。

「興安丸に、まだ、もちつと乗れるけえ、行きなさい！」言われて。

「わしら興安丸に乗つて。そいで、ハア仙崎へ行くことになつた。」をさせるんじゃけえ。

「あつち（金剛丸）へ乗つとつたら、どうなつたか分からん。いきなり博多から静岡へ。もうこつちへ（江崎の方へ）寄つたりなんかせんかつたらう。」

釜山に着いて、ハアどんくらい待つたかのう？ どの

つかの建物で、ひてい（一日）か二日？ 乗りたいね。

釜山港で乗船するのに大きい船じゃけえ。乗るまでにズーと建屋の中の階段を上つて行くんじゃが、目の

前に、おじさんが大きい荷物を負うてのう、その上にラジオをくくり付けとつちやった。そりゃあ、よう憶えとる。

船内か？

連絡船の中は、わややったいのう（ひどかったなあ）

！ 通路は臭いんじや。便所は床に穴が開いとつてのう、そこから直接うんこやら海に……。

船室の中は一杯での。へえで、横になるのがこう、くの字になるのが精一杯。

中には座るんが精一杯で。へけえ、こねえしとる（膝を抱いて）人ばかりじゃったいね。

便所なんかしに場所を離れて帰って来た時にやあ、もう座られんのやけえ、うん。

どのくらい乗とつたかつて？ 一昼夜かのう？ 昼頃出航したと思う。

ん？ 食べものう。やっぱ、船内で食糧の配給が

あつた。「皆集まれえ！」ちゅうて。一遍もろうて食べた。何じやったかのう？ 忘れた。もう、ひもじゅうてガツガツしてのう。

へけえ、ここ（江崎の叔父の家）に着いてイワシの煮付けよばれたんは、うまかつたいのう。

食べることに文句は言わない。ありがたい。釜山のひもじい思い、思い出した。あれを思い出したあ。

贅沢なんじやあ（なんか）、言わりやあせん。

5 仙崎港上陸

仙崎に着いたろう？ 興安丸で。すぐには上陸せんのだじや。

仙崎港（※2）には大きい船は入れんけえ、深川沖に停泊して。今度は、こまい（小さい）船に乗り換えて船着き場へ上がるわけね。

海が荒れとつてねえ。十メートルくらい高さがある

んじゃあ。そつから百人か、百五十人くらい乗れる船に乗るんじゃが、梯子が揺れてのう。怖おうて、おじさんにつかまって、ようよう（やつと）移つてから。

岸に上がると、そこへ進駐軍（ニュージールランド兵）が皆銃を持って警戒しとるから。

そいから（それから）、DDTを頭から服の中までかけられたんが、いやじゃつたいのう！ ありやあ。

6 護岸工事の砂山

そねえ（そんな）所の、まだ仙崎港の護岸工事（※3）の真つ最中かどうか分からんが。つい、砂の山があつちにもこつちにもありよつた。

その陰で、わしや用をたそうと行つてみたら糞だらけいのう。あれにやあ参つたのう。

仙崎港から正明市駅（今の長門市駅）まで汽車ですぐじゃが、それに乗つて行つた。大八車にトランクや

ら荷物を積んでもろうて行く人は歩くんじゃ。わしや汽車に乗つたと思う。

7 正明市駅

正明市駅へ着いたらのう、子どもが、ハア「しっこしたい！」て。列から離れたら後回しになるじゃろう？ はけえ（だから）、そこへしやがんでから、親がつい、しっこをさせるんじゃけえ。

駅舎の隅の方には、しっこ糞だらけ。あれにやあ、たまげたいのお。

叔父さんにやあ、連絡も付きやあせんけえ。もういきなり、正明市から（山陰線上りの）「益田

行き」じゃつたか？ 「米子行き」じゃつたか？ とにかく、あつちの方に向いていく汽車に乗つたいね。

たくさんの人での。こねえにようけ（こんなたくさん）人が乗れるんじゃろうかと思うほどの。

わしらあ運よく、その日の夕方汽車に乗れて。へえで、江崎で降りよういうことで。江崎で降りたんじやがの、着いたらもう暗うなつちよつたあね。

8 江崎駅の女駅員さん

引き揚げで帰って来た時、江崎駅にのう、ハア誰が居つたと思う？

女の人やった。柳井のおじさんの妹じゃつたか？

「こうこうで、朝鮮から帰って来た……」とか話した

あの頃は、男らあが兵隊にとられとるけえ。おばさんがふたり駅員しとつちやつた。

女の人が駅員じゃけえ。ほりやあ（それは）、びつくりしたいの。あれっ？と思うて。後は、ハア忘れてしもうとつた今まで。

お金を持って帰れたんかつて？

親父がやとつた散髪屋を朝鮮の人に売つたんじや。

朝鮮から持つて帰られる金額かあ？

姉ちゃんじゃつたら憶えとろうが、わしやあ知らんなあ。

後で聞きやあ、傘の柄に丸めて入れたりしたていのう（入れたりしたんだつてよ）。うちは、どうじゃつたか？

9 叔父さんの家に着いて

ほりやあ！ 叔父さんとおばさんは喜んだいのう。

ター坊が栄養失調での、尻にシワがよつとるほど痩せて。家の板の間の隙間に尻挟んで大泣きしたの、憶えとるいねえ。

姉ちゃん、一週間ほど居つたかなあ？

静岡（夫の勇次郎さんの実家）に帰って、（義兄さ

んが戦地から) 帰って来てのを待つ言うて。実家に居る方がええけえ思うてやろうて(思つてだろろうよ)。

姉ちゃんについて、そんな時、わしも静岡に行った。

みかんやら魚の干物持つてのう。

静岡に着いたはええけど実家の下の、こまい家にター坊と住むことになつて。

ター坊は下痢が続いとつてのう。へやけど、わしも

帰らにやあいけんけえ、二、三日して帰つた。

もうそれつきりいねえ。姉ちゃんとは離れ離れに生

きることになつたつちやあ。

叔父さんとおばさんには三人子が居つたが、皆死ん

どつたけえ、わしに漁師を継いでほしかつたんじゃろ

う。ほいで、山下の養子に。

学校かいね? 学校の証明書は持つとつたけど、行

きたいて言い出せんでのう。

十七からかのう? イワシの船に乗りよつたの。あ頃は、イワシはよう捕れたけえ。

10 出征写真と勇次郎さんの戦死

出征する前に撮つた写真じゃ。「昭和十九年四月二

十四日」つて裏に書いてあるう? ター坊の百日ももかの記

念写真撮つたやつ。勇次郎さんとター坊と姉さんとわ

し。

義兄さんかあ? 散髪屋の職人じゃつた。姉さんと

背が変わらんじやつた。うん、小柄じゃつた。姉ちゃ

んの方が高かつたんじやあなかるうか(なかつたんで

はないかなあ)?

姉ちゃん、義兄さんから二枚郵便葉書が来とつたの

をお守りにして、いつつも持つとつたいねえ。

この写真かあ? わしが持つて帰つたんと違うて、

兄ちゃんが京城で写真撮つたのをここ(叔父さんの家

に送つとつたらしい。

おぼさんが仏壇に入れとつたのいね。十四、五枚重

ねて入れてあつたんがこれ。残つとるのはこれだけ。

これがなけりやあ、おふくろの顔も分かりやあせんけえ（分からないから）。二つん時、死んだんじゃけえのう。

姉ちゃんが静岡に帰つて年が明けて間なしに、義兄

さんが、「フィリピンのミンダナオ島で戦死」したつ

ちゆう知らせがきたんじゃあ。

もうそれから何ぼもせんうちに、姉ちゃんは実家を

出て町に……。住み込みのラーメン屋で働いた。

ター坊が高校出て大分してから、のれん分けしても

らうての。店出して。きつておぼさんがおぼさんがおぼさんが

親子で苦労したいのう。じつじつ（思つたぶん）。

おぼさんがおぼさんがおぼさんがおぼさんがおぼさんが

11 灯舟 ひぶね

わしあ、叔父さんを継いで漁師になつたんが十七。

イワシ漁の灯舟に乗つてきたいねえ。

灯舟いうんは、イワシの群れを見つける船のことじゃあ。

真夜中にのう。他のもん（者）より先に、たつたひ

とりで海に出るんよう。星の輝人（あかり）の船（ふね）。

群れを見つけたら他の十隻の船に無線で知らせる

んじゃが、皆が来るまで、そうじやのう半時間くらい

かのう……。

待つとると、ふうつと恐ろしゆうなる時があつての

う。おぼさんがおぼさんがおぼさんがおぼさんがおぼさんが

そんな時、引き揚げんことを思い出すんじゃあ。

おぼさんがおぼさんがおぼさんがおぼさんがおぼさんが

生きることに必死じゃつたいねえ。

戦争は、しちやあいけん。

わしらの人生、狂わしてしもうたけえ。

二度と戦争は、しちやあいけん。

……

話せてよかったいのう。

生き返った気がするつちやあ。

(※1) 興安丸(七、〇〇七トン)は、昭和二十年九

月二日から、敗戦による引き揚げの運航開始

。興安丸での最初の引き揚げ者は、七千人だ

った。船腹にある「白十字」のマークは、敗

戦国の印。白十字が中立国のシンボルであつ

た。

(※2) 仙崎港には、昭和二十年九月二日から昭和二

十一年三月までに、四十万人余りの引き揚げ

の人びとが帰港した。また、三十四万人ほど
の朝鮮の人びとが仙崎港から帰国した。

(※3) 興安丸は元々下関港が引揚げ港だった。しか

し下関港は連合軍の爆撃で、港灣施設や市街
地が破壊された。また、機雷投下で船舶の入

港が出来なくなったため、急きよ下関港から

仙崎港へ変更となった。父が仙崎港に上陸し

たときに見た、いくつもの砂山は、護岸工事

のためのものだった。

参考資料

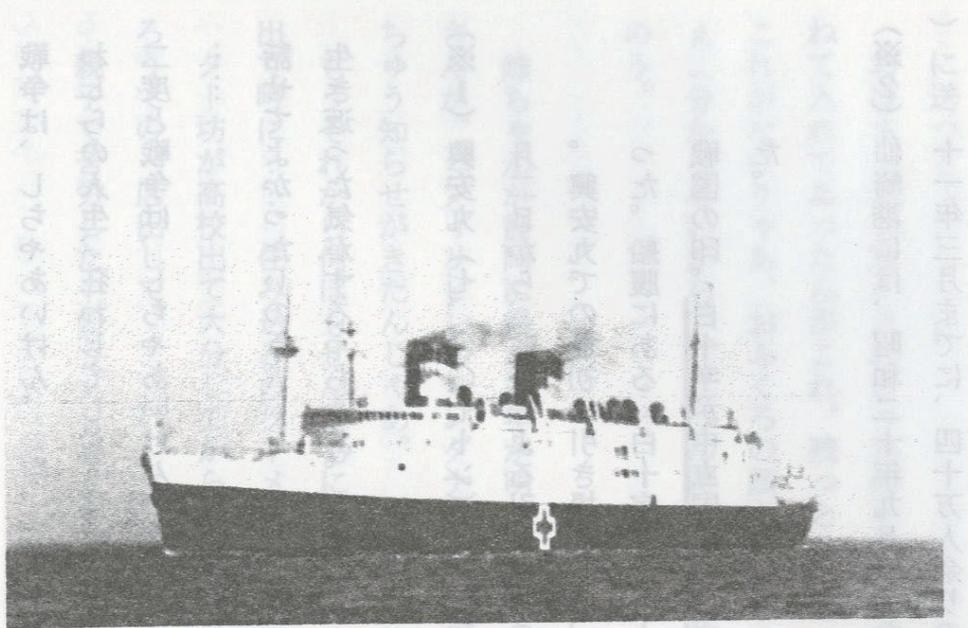
(1) 「『歴史の証言』―海外引き揚げ50周年周年記念切手集」長門市

編・海外引き揚げ記念行事実行委員会刊(平成7年)

(2) 「さらば千崎引き揚げ港 敗戦・激動の狭間から」萩原晋太郎著 ナ

ルジュ社刊(1985年)

(3) 雑誌「郷土資料ながと」



興安丸は、十一月三日まで引、四十日、
 (後) 興安丸は、十一月三日まで引、四十日、

母の手紙

帰帆場は母の居る私の原風景

渡邊 満子

古い手紙を整理していたら、五十数年前の母からの手紙が二通あった。封筒の宛先は「大船渡市大船渡町明神前八ノ八 渡辺満子様」と書かれている。なつかしい母の字だった。

夫の転勤で私たち家族は大船渡に住んでいた時期がある。長男の展也が小学一年生、長女の初夏が幼稚園、次男の拓也が三歳だった。夫は毎朝、出勤前に子供た

ちを連れて海辺に散歩に行っていた。姑が脳梗塞になり、急遽江釣子に帰ってきたので、二年間だけだったが、温暖な土地での生活は楽しかった。

母の手紙 1

「お便り有難う。本当に懐かしく拝見致しました。子供らの写真、元気な姿を見て安心致しました。

展也の一年生りつぱです。おじいちゃん、おばあちゃん喜んでいますよ。子供たちを大事に可愛いく丈夫によい子に育ててください。私等二人相変わらずその日その日を過ごして居ります。私は花や町の人達と日光に行ってきました。それから婦人会の人達と秋田の温泉にも行ってきました。今年は田を作るので今田植えの仕たくです。隆さん達二人、五月五日頃北上に来て七日ぐらい泊まっていきました。セイ子も十月には赤ちゃんができるそうです。和子も変わらず元気、尚子も淳も昌郎さんも元気でやって居ります。有田では淳一が工業に入り、茂樹は中学生、姉さんも大変です。

北海道の俊子から便りありますか。さっぱりありませんが心配しております。八月には東京の栄子も来るようですし皆なの来るのを楽しみにおまち致して居ります。ではお便りください。

眞吾

様

満子

母より

母の手紙2

「しばらくご無沙汰致しました。お便り本当にうれしく拝見しました。展也や初夏、拓也皆元気で居る様子目に見える様です。正月には北上に来るのを楽しみにして待つておりましたが残念ですね。色々の心づくしをいただいて本当に有難ふ御さいました。セイ子さんも大へん喜んで居ります。家の皆心から御礼申します。

晶子も大きくなり毎日元気にオツパイを飲んで居

ります。尚子も赤ちゃんを見に時々来ます。私達も孫をもうけて毎日楽しく暮らして居りますからご安心ください。春になって暖かくなったら大船渡の方へ行きたいと思っております。

寒さがきびしくなります。皆様お体を大切によいお年お正月を迎える様祈つて居ります。りんご一箱送りました。

右御礼まで。またお便りください。お待ちいたして居ります。

眞吾

満子

母より

手紙を書くことなどあまりなかった明治生まれの母からの手紙だった。一生懸命に書いたであろう母の手紙を今読んで胸がいっぱいになった。

北上の帰帆場は母の居る私の原風景です。

一年中滾々と清水が湧く帰帆場は、生家から歩いて五分でした。雨の日も風の日も雪の降る日も母は両手にブリキのバケツを提げて帰帆場に行っていた姿が浮かんできます。

帰帆場

帰帆場は 冬でも温ス

湯気が立ててに横たわる真冬の日本列島から、果ては湧き水 いっぱい 大海原の中で、常夏の赤道を越えて流れるス

手はひびだらけ

腕はかさかさかわいていた

毎日 バケツを両手にさげて

洗濯に行く 母だった

だんだんの坂を下ると

いちめんの芹田

櫓ツコに入って 待つわたし

ちらちら淡雪 舞っていた

冷たい日ざしが水の中

手ぬぐいの花模様がゆれていた

空は夕焼け あかぎれの色

清水が チロンと鳴っていた

ピースボート

「オセアニア・クルージング」で

出会った人々のこと

佐藤 恵美

太平洋の北半球に横たわる真冬の日本列島から、果てしなく広がる大空と大海原の中、常夏の赤道を越えて真夏の南半球のオセアニアへ、二〇一九年十二月二十一日から年をまたいで二〇二〇年二月十五日まで、五十六日間の船旅に参加した。

乗船した船の名は「オーシャンドリーム」、総トン数三万五千二六五トン、全長二〇五m、この船旅の乗客は八〇〇名。

航路は、横浜・神戸港から出港、中国東海岸の厦門（アモイ）、フィリピン（セブ島）、インドネシア（バリ島）と寄港。南太平洋の「オセアニア（オーストラリア大陸、パプアニューギニア、そして一帯に広く点在するメラネシア・ミクロネシアの島々）を十三カ所訪ねて、日本に戻った。

総全長距離二万六六五二km（一万四三九一海里）。

寄港地から寄港地の間は洋上での船内生活となる。

船内だけでも、日々見知らぬ人々との出会いがある。国や言葉の違いを超えて、思い思いにコミュニケーションを楽しむ。さらに船内では多種多様な「集い」が企画されている。私の場合、主に中国語、太極拳、俳句に取り組んだ。さらに一日三度の食事、午前・午後のティータイムのひと時、四階から八階まで

のデッキを大海原を眺めながら散策していても、ちよつぱり興味のある麻雀に誘われても、様々な人々との出会いがある。狭い船内ならではの得難い貴重な経験と出会いに恵まれた船旅を、日々懐かしく思い出している。

馬鉄英・小梅（姉妹）、（中国・北京）

神戸から出航、中国・厦門（アモイ）に向かうまでの最初の三日間の洋上生活で、四階のリドデッキでは、午後のティータイムの時間だった。

中国語で話し合っている二人連れの女性を見かけ、「ニー・ハオ（こんにちは）、ハオ・マ（ご機嫌いかが）？」とたどたどしい中国語で話しかけた。

「ヘン・ハオ（元気です）、ニー・ナ（あなたは）？」と、とにっこりと微笑みながら応じてくれた。これを切っ掛けにして、姉妹との交流が始まった。

私は「ジメイ（姉妹）・マ（なの）？」と聞いた。「ドエ、（そうですよ）」と答える。

実は、このクルージングに、私も妹を誘ったのだが、色々事情があつて同行できなかったから、この中国人の姉妹が羨ましく思い、話しかけたのだった。

二人は北京に住んでいるという。そして私が中国語を話せるのはなぜか、と問いかけてきた。

もう二〇年以上前になるけれども、夫が「北京語言文化大学」の日本語教師として、二年間中国人学生に教えていたこと、私も一緒に北京で生活したこと、そしてその大学の短期コースで中国語（漢語）を学んだことなど、お茶を飲みながら談笑した。その後もこの

場所で顔を合わる度に声をかけ合うようになった。話し込む間に、お互いに気心が通じ合うようになっていった。

姉妹は日本語に大いに関心を示し、「ニー・ハオ」は日本語では何と言うのか、とか、「（ヘン）ハオ・チ（美味しい）」は？「ザイ・チエン（別れの挨拶）」は？などと姉はスマート・ホンを片手に熱心に

日本語を覚えようとする。

妹も聞き取りの勘がとても鋭く、覚えが早かった。

ある時、妹が具合悪そうな様子なので、「シヤンテイ（身体）・ハオ（好）・マ？」と彼女の体調のことを訊ねて見た。姉がスマート・ホンを取り出して、妹が六ヶ月前に腹部の腫瘍を手術した映像を見せてくれた。

それから会う度に顔色もよくなり元気になった。あるいは、船酔いも重なったのかも知れない、とも内心思ったりもした。

私も、出航当初、洋上の大波による揺れに馴染めなままに、二、三日船酔いがひどかった。酔い止め薬を飲んだりしていた。

姉妹との交流を通じて親愛感が増す中、ガーゼ地の汗拭きをプレゼントした。

間もなくお返しに、バラの模様のスカーフを頂戴した。

デッキは結構冷えるので、そのスカーフを首に巻いていると、嬉しそうに笑みを浮かべてくれた。

日本への帰路の船内行事、「洋上夏祭りの集い」には、持参した藍染めの単衣に岩手盛岡伝統の南部古代型染の紫紺の帯を締めた。姉妹と一緒に写した写真を

「奇麗、奇麗」と大はしゃぎして、早速船内の売店でプリントして裏面に“惠美”と手書きして、プレゼントしてくれた。同様に帰路の途上、「洋上カルチャー・スクール発表会」があつた。

私は二四式太極拳と中国語講座を受講していた。ステージで太極拳を音楽に合わせて実演した。

中国語クラスでは「ウオ・ハ・ニイ（私・と・あなた）」という北京オリンピック・テーマソングを中国語

で歌った。そのステージでは、ひとりの中国人男性がバイオリンで伴奏していた。なんと彼は食事の時にテーブルが何度か一緒になって、顔なじみの人だった。

彼は以前東京に留学して六年程音楽を勉強したと言

う。日本語を上手に話す。

「なんだ、」ということで、互いに大笑いした。

私の、二度のステージを姉妹はスマホで撮影していた。

クルージング最後のお別れにデッキで会った時、私のスマート・ホンを写真をコピーしてくれた。思いもかけない姉妹の温かい行為に驚いた。おかげでピース

ポートでの舞台発表の様子を再生する度に深い友情の思いを味わっている。

二月十五日、横浜入港。

最後のリドデッキの朝食でも会えた。

『一定去北京（イーデン・チュ・ベージン）「きつと北京に行くよ！」と堅い握手をして、別れた。

鄭静妹 台湾国新北市

私と同年齢、日本が台湾を統治していた頃の話を知っていた。日本名は厚子。今でも日本の生活習慣が身についている、と話していた。父親は良く日本に行っていた。父親の亡き後、弟が金属工業仕事を継いでいる。船内で日本の歌の講座を受けていた。日本語が思いついて話せるようになったと、喜んでくれた。カラオケに誘われて一緒に歌ったりした。

Jay Jay Celsa (ジェイ・ジェイ・セルツァ)
インドネシア

学校訪問をした時の卒業生、四年間奨学金をもらって、卒業した。日本の自動車会社で六年間働いた。

ところが、交通事故に合い（タイ人の運転する車）会社をやめてフィリピンに帰って来た。

いまはこの学校で仕事をしている。

日本語が話せるので、勉強をして日本語の先生になって日本との橋渡し役をしてほしいと励ました。

陳金秋 台湾高雄市 仕事（食堂などの設備

設計）共に麻雀をして知り合う。船内をすれ違う度に会話を楽しんだ。日本の浴衣を着たり、共に食事をしたり、中国語と筆談などで気が合った。

吳偉群・陳介安（台湾台北市）

アイク（4歳）とボリ（2歳）の子供連れ夫婦。夫はIT関係、妻は英語通訳。叔父伯母や従兄弟たち大勢で乗船していた。食事ではいつも一つのテーブルを確保して大賑わい。現役でありながら、小さい子連れて長期間の休暇をゆつくり旅ができる台湾の国柄を知り羨ましかった。彼らは日本語を色々知っていた。中国本土とも違う台湾を垣間見た様に思う。

趙蓮清・趙俊平夫妻 中国北京

寄港地では、下船のおりによく見かけた。

妻の蓮清さんは学校の教師を退職後、筋肉が衰える病気になる。夫の俊平さんは現役の医師。折りたたみ式の自転車を携行していて、下船時には夫婦揃ってヘルメットをかぶり、自転車で自由に乗り回っている。病気の蓮清さんの体調に合わせて夫はペダルを踏む。健康維持に大いに役立っていると、夫婦は微笑む。

船中でもすれ違うたびに、「趙さん！」「エミさん！」と声をかけ、おしゃべりを楽しんだ。

谷慶子 中国語教師（茨城県）。夫は日本人。ピースポーツのスタッフ。登山が好きだというので、故里、岩手の山に是非、と約束をした。

小林千江子 太極拳講師（川崎市）。毎朝七時〜八時まで、二〇人ほどが集まる。川崎でも稽古場で指導をしている。

戦争中、父親は満鉄勤務だった。母親と船で中国を訪れたことがあるという。

「帰国しても続けてね」といわれた。それで私は、毎週土曜日、近所の地区センターで稽古に励んでいる。二〇年前、北京語言大学のグラウンドで早朝に、中国人教師の指導を受けていた。この船旅が切っ掛けで、又エンジンがかかった。

米山恵子 陶芸家（静岡県）。富士山麓の御殿場で陶器づくりに専念のご様子。帰国して、早速陶芸展の案内状を頂いた。しかし、新型コロナ禍の最中に遠出は叶わず、電話で祝意を伝えた。コロナ終息の折、是非お伺いしたい。

中井忠 沖繩守る会（神戸市）。船内でも沖繩の辺野古基地反対の署名集めに取り組んでいた。さらに船内で「沖繩の現状を語る会」も実践していた。またオセアニアの現地の学校訪問でも、ご夫婦でボランティア活動を通じて地元の子供達と積極的に交流していた。

私も岩手で夫や友人知人達と沖繩問題に取り組んで
いる。ご夫婦の取り組みに共感する事が多々あった。

勝又みずえ（山口県）。頂いた名刺に「田舎暮し
人」と記されている。

試みにインターネットで「田舎暮らし人」を検索する
と、勝又さんホームページが見つかった。何と素晴ら
しいキャリアに驚いてしまった。日本に「女性議員を
増やす会」という運動をしてあちこち飛び回っている

恵泉大学園芸科を専攻。自分の家の周りや道端に沿
って様々な花木、草花などを植えまくり、手入れをし
て暮している。さらにはこれから留学をして英語を学
び、フィリピンのような国でボランティア活動をしたい
などと、夢を大きく膨らみます人。

増田雛子 麻雀（名古屋）。久保田悦子 書道の先
生（茨城県）。私と三人、何故か気心があい、結婚や
仕事や趣味など話題に尽きることなく夜中までお
しゃべりしすぎた。書道も麻雀も中国がご本家。

同室の人。吉田和子（福岡市）ピースポートは何

度も経験。ピースポートの事務所支所などに、出入り
してポスター貼りのアルバイトなどをしながら学び、
資金も貯めた。元銀行勤務、単身。目的を持ち計画的
に過ごす、フルートの練習やソーシャルダンスの習得
などで友達も多く、インドネシアに何人かで合宿をし
たり、今回も次の観光地まで飛行機で飛び一人旅。知
的好奇心と行動力には感心する。

谷本レイ子（神戸）クルーズも一度ならず、飲食
関係の仕事で、単身、株で資金を作る。姉妹や親の面
倒を看た苦勞人。話題が豊富。船内では「麻雀の女
王」の称号を享ける。経験豊かな二人には船内の過ご
し方など親切に教わった。四人一組の船室生活では、
様々なトラブルも耳にしたが、私達は終止和やかで楽
しく過ごせた。

島玲子 俳句会主宰（徳島県）。医者の方君に先立
たれ、クルージングは飽きる事も無く経験を重ねてい
る。医者を継いでいる息子さんには「好きなだけクル

「ージングを楽しみなさい」といわれるとか。結婚はお見合い。結婚して夫の寝顔を見て、何でこの人と一緒になったのかしら！などと色白な老婦人が冗談を交えながらの俳句の選評が楽しかった。乗船する度に俳句会を主宰していらつしやる。週に2、3回の会で指導を受け、十四人の人数に落ち着き、船旅の終わる頃には「オセアニア句会」という句集にまとめあげた。

大坪秀子 句会仲間（小群市）。夫君が亡くなり、財産を処分してマンションで一人暮らし。山歩きが趣味で国内外に出かけて久しぶりの事。俳句でもとても気が合い句集作りも協力し合った。岩手の山にも是非、と約束してある。

残間照市・えり子夫妻 俳句仲間（横浜市）。夫の照市さんは半身不随で車椅子生活、妻のえり子さんとクルージングを一緒に楽しんでる。俳句の会は夫の照市さん一人参加。お互いに作品を批評し合うときは、「なかなかわくわくするような句がないなあ」となかなかの辛口批評を楽しんでいた。

「オセアニア句集」から私が適当なもの一句づつ選んで、ご披露する。

出航へ月のタラップ登りけり（玲子）
山火事やユウカリ煽りコアラの死（エイコ）
新年や異国言葉で船の旅（純也）
船旅の学び嬉や初句会（民子）
空青く初蟬ふいにバリの寺（秀子）
荒波や夫と初旅インド洋（周子）
わが船は春満載の宝船（照市）
春風に平和の船や万国旗（敬代）
ブリスベンジャスマン充る丘に立つ（エミ）
春暑し二階建てバス三周す（富雄）
飛ぶイルカ水平線に初発見（千鶴子）
福笑いホントに似てる妻の顔（逸治）
アポリジニ・エアーズロックの聖地見ゆ（繁登）
出港や雨降る神戸友の顔（聖子）

“エール” 平和と希望

佐藤 弘子

令和2年(2020)NHK朝の連続テレビ小説「エール」が始まった。福島出身作曲家古関裕而(明治42年(1890・8・18)をモデルとしたドラマである。

幼少期より音楽に目覚め、「音楽で人々に“エール”を送りたい」との思いで音楽関係の職につき、そこそこ音楽で生活できるようになったが、時は戦争という大きな転機を迎え否応なしに戦争へ関わっていくのです。

時代が求めた音楽

昭和5年(1930)レコード会社専属となるも作曲家人生は決して順調でなくヒット曲も出ず、唯一「船頭可愛や」が世に出たが、作曲家としていまいちであつた。

昭和12年(1937)日中戦争が始まる。国民の戦意高揚のための音楽が求められるようになり、各レコード会社は競って戦時歌謡の制作に取りかかりその一員となつたのです。

出兵する兵士の心情を描いた詞に哀愁を帯びた短調主旋律の曲をつけ、大ヒットとなつた。

その歌は「露営の歌」

♪「勝つてくるぞと勇ましく・・・」

これを機に、戦時歌謡の第一人者と呼ばれるようになり、数々の曲を生み出していった。

昭和15年(1940)陸軍からの依頼「暁に祈る」を作曲する。

♪「ああ、あの顔であの声で……」ラジオで日本の活躍ぶりを伝える「ニュース歌謡」に起用された。

従軍部隊として中国大陸に渡った時、行き先々で、兵隊たちから故郷に残した家族の安否の問いや、戦場に行く不安な声を聞くたび胸が熱くなり、その思いを汲み取り、出兵兵士を勇壮に送り出す力強さと生還を望む望郷の念を込めて作った曲だと言う。

昭和16年（1941）太平洋戦争開戦「若鷺の歌」

♪「若い血潮の予科練の」海軍航空隊の飛行予科練習生の兵舎で彼らと生活を共にしてできた曲である。戦争は、古関が思っているとは裏腹に次第に不利となっていたが、歌だけは兵隊ばかりでなく、国中を戦争勝利であるか如く大ヒットとなってしまう。

二番の詞の中に「見事轟沈した敵艦を母へ写真で送りたい」「これを読んで、「すさまじい内容だ。ただただすごい！としか言いようがない」複雑な気持ちでメロデーをつけたと言う。

時同じく昭和18年、女子挺身隊発足し女性の家庭外への動員が組織化されると

大日本婦人会が総決起を開催し、決戦に臨む婦人の覚悟を結集した。

その内容は

戦士を皇国に捧げませう（ましよう）

決戦生産に参加させよう（ましよう）

長袖を断ちませう（ましよう）

言うまでもなく息子、夫を戦場に送るということであり、広くは戦士を生み出そうということである。

注1 （20歳未満の未婚女性を除く全ての女性を会員とする国策婦人団体）

昭和19年（1944）3月8日

戦況がさらに悪化。「命かける尊い人たちを応援したい！」との思いで慰問を決める。

戦争の時代に入ってから、たくさんの戦時歌謡を作曲した。だが、自分の作った歌（曲）に鼓舞

されて戦いに行き「死ぬ人がある」ということの重さを頭で分かっているにもかかわらず、曲を作っている時は実感ができていなかったたのである。

慰問先のビルマ（現在のミャンマー）に向かった。

インド北東部の要地、インパールを攻略する作戦が進行中だった。兵士たちとつかの間の交流を楽しんだがしかし、目の前で戦闘が始まり地獄のような光景を見た。

この時の心情を後程こう語っている。
人を戦争に駆り立てることが、自分の役目なのか！

私は、……音楽が憎い……。

大切な人を戦争で失い心に傷を負い、自ら音楽を封印したのです。

昭和19年（1944）7月7日

戦況はさらに悪化。サイパン島玉砕。男性兵士だけが戦死したわけではない。19年に入ると、女

性挺身隊播磨造船所（現兵庫県姫路市）に143人入所し、半数の女性兵士はサイパンに置き去りにされた。女性は虜囚の辱めを恐れて自決。

軍事政権は、さまざまな法律や組織や心理的な政策によって女性たちを戦争に動員することに成功した。その中でも最も深く母性たちの心に浸透し、その全存在を戦争へと向けさせていったのは実は法律でも組織でもなかった。

それは、文学や映画や音楽や絵画などの文化によって魂の底に浸透していった。戦争賛美の言説の魔力であった。そこには驚くほどたくみな、また真剣なたくらみが潜んでいた。

サイパンで自決した女性は、日本軍部による犠牲の犠牲者だった。

注2（参考、若桑みどり（1935）戦争が作る

女性像より）

昭和20年（1945）

2月1日 女子航空整備員採用

3月6日 国民勤労動員令交付

3月10日 陸軍は女子衛生兵600人を確保

その日、米軍による東京大空襲起こる

全国23カ所、死傷者12万

3月25日 妊婦・幼児の集団疎開開始

※ 26日アメリカ軍沖繩慶良間諸島に上陸戦開始

6月23日 国民義勇戦闘隊編成

15歳〜60歳男子 17歳〜40歳女子

明らかに戦争は敗戦になっているのにも関わらず、古関が体験し地獄化した戦場に参戦として送り出された若者達、国内では衛生兵として働く看護婦。この状況を伝えるマスコミは、彼等、彼女等をこう伝えた一部の文言がある。

注³

『家庭は、最後の戦線』ここが勝敗の岐れ目だ。

長期戦の戦後の戦線は、われわれの家庭だ。

ここを攻めてここを落とすのが最後の作戦だ。味方が敵の家庭を狙ってをる。この事実を今こそはっきり知るべきだ。……家庭の司令官はその家の主婦だ。奥さんだ。お母様だ。

家庭の主婦の方々は、自分の大任を自覚してをるだろうか。果たして強い司令官であろうか。頑張りのきく指揮官であろうか。家庭が戦線の最後となった今日、思ふのは昔のわが婦人である。

武士の妻や娘の気丈さである。

敵に後ろを見せなかった昔の婦人の勇氣である。

……戦って戦って戦い抜く勇氣が、今もみなぎっているのだ。それを事実を示す時が来た。日本婦人の新しいほまれは、今やわれわれの前にある。

光栄ある昭和の婦人の上にある。

この日6月23日、沖繩は全滅。兵士国民合わせて死者19万、そのなかでも国民は10万超えた。

またもサイパンと同様、日本軍部による犠牲の犠牲者だった。

昭和20年(1945)8月15日 日本無条件降伏

注3 (戦争がつくる女性像より)

戦後 昭和20年(1945) 10月

音楽から離れていたが、生涯にわたるパートナー、菊田一夫と再会で、再び音楽の世界に戻ってきた。敗戦から復興への道を歩む日本人の心に寄りそい、生きる希望を与える音楽をの思いを持ち、曲作りに取り組んだ。

当時、東京NHKは、一部GHQ(アメリカ連合国軍司令官総司令部)に接収され曲も詞も内容はすべてGHQの管理下(占領下)で許可された。番組のドラマのみの放送しかできなかつた。長い時間を経て昭和22年(1947)GHQの管理下の指令によって生まれたラジオドラマが「鐘の鳴る丘」だった。(昭和22年7月)

終戦直後に深刻な社会問題となっていた戦災孤児を救済するためのキャンペーンとして生まれたドラマだった。劇中音楽と主題歌「とんがり帽子を作曲。

♪緑の丘の赤い屋根 とんがり帽子の時計台

鐘が鳴りますキンコンカン・・・」自分が作る曲は戦争で傷ついた人々の心を励まし、勇気づければ、自分は苦しいが、日本中の皆に少しでもエールを送るのが今の自分の役目と自分自身に言い聞かせて望んだ。

これをきっかけに、平和への祈りを込めた歌謡曲(メロディー)が次々とラジオを通して日本中に流れた。

同時期「夢淡き東京」作詞者サトウハチローとの出会いでできた曲

♪柳青める日、つばめが銀座をとぶ日・・・

空襲で焦土となった東京の街に復興の兆しが見えはじめた喜びの歌であった。

昭和24年(1949)

ラジオ放送から映画の主題へと進んで原爆の現実を克明に描いた「長崎の鐘」の著者、長崎医科大学永井隆

博士と出会う。長崎を訪れ、永井博士に話を聞きたいと問い投げたら『原爆で焦土化した長崎・広島を見て、神は本当にいるのか？ どん底まで落ちたその意味は分かるか』と答えたと言う。

その答えを見つけないことが曲作りのきっかけになるはず・・・の言葉を受け、原爆投下の場所に行き答えを見つけたのであった。原爆ですべてを失った人達が、瓦礫の中から必死に掘り起こした鐘が焦土と化した街に響き渡ったとき、その鐘の音が生きる勇気を与えてくれたことを知る。

永井博士のもとに駆けつけ博士から「どん底まで落ちて大地を踏みしめ、共に頑張れる仲間がいて初めて真の希望は生まれるのです。」

その言葉を胸にサトウハチローと再び会い、詞を依頼し、出来上がった歌が「長崎の鐘」で国民に大きな力を与えた。

♪こよなく晴れた青空を 悲しと思うせつなさよ
うねりの波の人の世に はかなく生きる 野の花よ

なぐさめ はげまし 長崎の
あゝ長崎の 鐘が鳴る

この歌は古関がたつての希望で歌手藤山一郎（1911～1993）にお願いした。

藤山は太平洋戦争時（昭和20年）南方（インドネシア）に慰問中終戦を迎えたが、捕虜となり収容所生活を送り帰還してから古関と会い、戦争で過酷な体験をした藤山だからこそ戦争の犠牲になったすべての人々への鎮魂歌として、また傷ついて立ち上がるうとする人々への応援歌（エール）として「長崎の鐘」を歌えるのは彼しかいない…と伝えている。

スポーツに託す青春賛歌

戦後GHQの民主化政策が日本にもたらしたものは数々あり、そのひとつが学制改革だった。旧制中学は新制の高等学校となり、これに伴って昭和23年（1948）からは、全国中等学校優勝野球大会が全国高等学校野球選手権大会と改称された。

これを機に新しく大会歌「栄冠は君に輝く」が生まれた。この曲は現在（令和2年）も夏の甲子園大会で開会式閉会式に歌われている。またJR福島駅の新幹線の発車メロディーともなっている。

昭和27年（1952）から始まり、今（令和2年）も放送が続いているNHKラジオの長寿番組「ひるのいこい」のテーマ音楽もそのひとつだ。

そんな作曲家としての集大成と言えるのが昭和39年（1964）東京オリンピックの開会式で入場曲として使われた「オリンピックマーチ」だろう。敗戦国日本の復興の象徴であり、平和の象徴であるオリンピックの晴れ舞台を彩った。

作曲家人生のすべてがつき込まれた曲だった。

昭和史を色濃く反映した音楽こそ、古関のメロディーであり、戦前戦中戦後と世相を映した古関メロディー

は、各時代を生きた人々への応援歌（エール）であった。

令和2年（2020）古関裕而のドラマが始まると同時に、新型コロナウイルスの感染が日本を初め全世界でまん延し、雲をつかむような感染症に人々は不安を募らせオロオロするばかりであった。

コロナで始まりコロナで終わらない2020年、今古関が生きていたらこの状況をどう見、どう私達に声をかけてくれるだろうか。

きつと力強く、そしてやさしいエールを送ってくれる気がします。

また、収束（終息）した時は「よかったねえ〜本当に頑張ったねえ〜」皆に平和と希望のエールを下さるのでは・・・と思っています。

感謝の45年

宮崎順子

1 高校生

私が高校2年生の時、同級生で男子クラスだったTさんは生徒会役員で寡黙で落ち着いた人でした。

そんなTさんがある時、突然歴史物の本を貸してくれました。私は、Tさんにも歴史の本自体にもあまり興味がありませんでしたが、何度も

貸してくれたので何冊かは読んでみました。お返しに私の愛読書を数冊「井上靖」と「夏目漱石」「武者小路実篤」を貸した覚えがあります。当時、私の家には母が読んでいた吉川英治の本くらいしか無く、本を読む習慣がほとんどありませんでした。自分の読書の世界は偏食に近かったので、Tさんとの本の貸し借りは、その当時の自分にとつて「楽しい」と思える空間のひとつでもありました。

2 職業訓練校

高校3年生まで進学希望だったのですが母子家庭だった私は、実務（洋裁士）の道へ進むことに最終進路を決めました。一人前の職人になる為、盛岡の職業補導所（現、職業訓練校）に期間1年入校しました。

月謝のかからい寮に入寮し、20人1室で自炊で

した。仲間は自分の環境に似た人達ばかりでした。毎日朝、授業前にボタンホールのかかがりの競技練習で、「ストップウオッチ係がおり、」早く、美しく、正しく寸法通りかどうか”を競い合い、練習に励みました。職業としての国家試験（実技と、理論の2日間）に向けて日々ひたすら技術向上にも努めました。内1年間、前半は基礎科、後半はお客様の洋服を製作するプロ同様として学びました。

卒業間近の12月の寒い日に、盛岡の中の橋付近を、買い物帰りになんとなく歩いておりました。そんな中、ふと見覚えのあるコートを着た女性とすれ違いました。私は即座に「わあ！あの時私の作ったコートだ！！間違いない！懐かしい」と思い。当時二十歳の私は心臓が割れんばかりにドキドキして、少し歩いて踵（きびす）をかえして、そのコートの若い女性の後を急いで追いかけてました。その時の情景と感覚は60年前の出来事ですけれども今でもはつきりと覚えています。チェックの柄がきちんと合っている

か？裾がダラけていないか？どこかほころびていないか？肩幅がフィットしているか？を横目でチェックしてしまいました。自分の製作したコートが、とても素敵で若い女性に着てもらっていたのを見てものすごく安堵しました。ちなみに職業補導所ではお客様と直接お会いすることは一切ありません。先生が、注文を受けて仮縫いと試着をした後仕上げて届けます。昭和30年頃は、ほとんど注文服か手作りでした。既製品という大量生産はほとんどありませんでした。

貧乏学生だった私は、白のブラウス一枚を毎日洗って、ごはんのりをつけてパリッとさせて繰り返し着ていました。もちろん勉強もしました。が当時盛んだった歌声喫茶へ出向き客皆でロシア民謡を大合唱で歌いました。食費を最大限に節約し1週間1回パン屋さんで山盛りのパンのミニ（店頭販売しないパンの切れ端）を買いました。それが当時の私の一番の”主食”でもありました。また、ジェームスディーンの映画「理由なき反抗」などにもお金を費やしました。

た。

3 人生の転機そして恩師、『二人の橋本先生』との出会い

37歳まで『洋裁が自分の天職だ!』と思っていた私が、当時子供の病気の主治医だった『橋本行生(はしもと ゆきお)』先生との出会いがきっかけで、なんの躊躇もなく新しく医学の道(仙台市の赤門学士院の柔道整復科)へ進むことに決めました。

思春期の子供たちを家において、朝早くから学校へ通う毎日。行き帰りの電車の通学時間が往復9時間、学習時間が8時間、帰宅してから家事がやつと終わり、就寝時間が3時間の毎日でした。そんなことの繰り返しで学校へは遅刻毎日。単位取得の為、遅刻しないように週に

2回は必ず朝3時に家を出発したこともありました。

そんな中、学校に通いながら通学の帰り道にある温古堂、仙台に住む『操体法』の創始者、『橋本敬三(はしもと けいぞう)』先生の元に入門させられました。先生からは「黙って見ていなさい。」の一言だけでした。2年間、質問もせず、ただひたすら先生の診療内容、行動、言動を食い入るように見て聞いておりました。

一歩家を出ると、子供たちの事が頭から離れず、心配の毎日。そんな中だけれども唯一電車の中は私にとって自分になれる時間であり、唯一学生の顔になれる空間でもありました。

そんなある日、私は家族が3日間十分に食べることができくらゐの量のカレーライスを食べ鍋に大量に作っていつものように学校へと向かいました。学習、通学に疲れてやつとこさ家に帰宅し、私の空腹もピークに近づいておりました。ホット一息ついて夕ご飯を食べようと、朝作ったカレーの入っているはずの大鍋の蓋を開けた

ら、なんと中身が空っぽ!! 『アレ?』と思いき
子に聞いたら「カレー、いっぱいあったから、み
んな(友達)つれてきて一緒に食った」と息子
に言われて、呆然としてしまいました。ある時は、
食材を仙台で購入して電車に乗り込み帰宅の途
についたのにも関わらず、疲れて寝落ちしてし
まい、水沢に到着のアナウンスで慌てて目が覚
め、スーパリーの袋を置き忘れたまま下車したこ
とも多々ありました。置き忘れの荷物は終点「青
森駅」まで運ばれていきました。今ではどちらも
笑い話です。このような状況のなかで2年間を
過ごしました。

4 開業

卒業した翌日に自宅内に開業をしました。温
古堂を2年間見学したことでインターンシップ

を免除していただきました。心や身体のゆがみ
を取る『操体法』をメインとした薬や注射を使
用しない治療の『小崎整復院』です。

現在私はお陰様で今年も元気に83歳という年
を迎えることができました。45年間、今現在も
好きな仕事に没頭でき、二人の先生との出会い
とご指導や助けがあつたからこそ今の自分自
身があると思います。もちろん家族の協力や母
親の助けがなければ成り立っていませんでした。

沢山の感謝の気持ち皆さんに恩返しする意
味で、自分の身体が動く限り最大限に”楽しんで”
『小崎整復院』を続けていきたいと思ひます。
そして皆が日々笑顔で過ごせるよう心より願っ
ております。

一等賞

多田 テル

小さい頃走る事が得意だった私
二等や三等は滅多にとった事が無かった
いつも一等賞だった

小学校も高学年になると

招待リレーに忙しかった

春の運動会 秋の運動会

なかでも黒沢尻小学校の

招待リレーはたまげたものだった

招待校が多く決勝戦まであった

校庭も広く観客も多く

町の学校は驚くことが一杯だった

そんななか今日も祖父は鶏小屋から

産んだばかりの暖かい玉子に小さな穴を開け

「これ飲んで頑張つて来や」と

がんにような縄緒の割りぬき下駄を

鳴らしながら門口まで送ってくれた

今思うと祖父は私のちよつとした

マネージャーだった

走ることが好きだった私も遂に
倒れ学校を休んだ

担任だった平和マーケットの

高橋俊夫先生が自転車の籠にお菓子を

一杯入れて来てくれた　うれしかった

子ども心にも

先生　店のお菓子持って来て

店の兄さんに怒られない様にと

思ったものだった

先生は祖父にお茶がわりと

酒を吞まされ

夕方黄金色に輝く田の道を

自転車で帰って行った

あの先生の姿と

ポンせんべいの味が忘れられない

小学校も終りの秋

三支会の運動会が

横川目小学校で行われた

朝から雨だった

雨は休まなかった

教頭先生が背広を脱いで着せてくれた

とても暖かった

直線の百メートルは

いつもの百メートルより

遙に遠く思えたが

一等賞だった

あくる日学校に行った

朝礼が有り

教頭先生が死んだと聞かされた

誰も声を立て泣かなかった

私だけが声を上げて泣いた

きつと背広を脱いで

寒かったのだ 私のためにと

小さな胸を痛めた

ずっとずっと

毎日 毎日

秋雨の降る日は

小さな胸は痛かった

そんな時父は仏様を

多田 テル

拝むことを教えてくれた

私の一等賞は

皆みんなの支えに有った

一等賞だったと・・・。。。。

2020年2月20日

朗読

詩の教室で手もとに

一冊の詩集が渡された

「石ころに語る母たち」

一人一人思いをこめて

高橋セキさんになりきって読んだ

最後に

小原麗子先生が朗読した

静かな教室には先生の透き通ったさわやかな声

感情を込め必死に

千三の姿を追った

夢枕

余りの感動に本を持つ手が震えた

涙が零れ切なかった

これが朗読なのだ

朗読ってこういうものなのだと感銘した

夜

仏壇にご飯と詩集

「石ころに語る母たち」を

供え拝んだ

父母が祖父母の思いが

日本の出征兵士の

親たちの張り裂ける

叫びが有りました

そして

ここにも泣いた親達がい

北上川の辺ほとりに住む

舅は

秋になると鮭を捕るのが常

築場で杭を打つ時

誤って手を打たれ

四本の指がつぶれてしまった

不自由な手と

身丈が足らずに

徴兵検査に不合格

国からはいらず者

小さな山村には村はずれ村八分

不合格は

家の恥とされる風潮に

舅と姑は泣いたと言う

仏前に

手を合わすと

白い幻達が

皆

戦後六十年を経て

私の心の中で

何事も無かった様に

静かに笑っていた

命

その1

木の芽が出揃った

山端の朧月に

「嫁を助けて」と

思いっきり叫んだ

その夜は根岸山の奥で

ふくろうも鳴いていた

嫁は乳癌だった

乳癌手術の日

家族は皆仏様に手を合わせたが

無口で落ち着かなかつた

あの日から九ヶ月

治療しながらも無事

毎日を元気に明るく過ごす

嫁に胸を撫でおろし

安堵している

その2

乳癌と聞くと

一生忘れる事の出来ない

恐くて悲しいものが

いつも心の奥にある

想えば

舅、姑が嫁に出したという

義理の姉さんが居た

姑は頼りにしている

元気の良い姉さんだった

が

末期乳癌だった

見舞いに行くたび

旦那様は枕もとで

修証義を目で追っていた

数日後 六人の子供を残し

お盆最中旅立った

姑は泣いた夜毎泣いた

運の無い子だった

三歳で母を亡くし父と別れ

親戚を盥たらひまわしに育ち

最後は舅、姑のもとで姉弟は

祝言をあげたのだと

いつもの静かな北上川

お通夜の北上川は

厳かな空一杯の花火に

人々は皆霊を送った

花火も終わり

静まり返った誰も居ない

堤防に姑と二人

静かに

静かに流れ行く

幾千の灯ろっこを

見送り涙した

届かぬ年賀状

初春のお慶びを申し上げます

お元氣でお過ごしですか

お逢いしたいです

無性に逢いたくなりました

歳の所為なのでしょう

元気で介護の日々です

と

年賀状をポストに投函した

一月五日の朝

二、三枚の年賀状の中に

旦那様の名前で普通葉書が届いた

病気なの入院しているのと

眩きながら裏面の本文を読んだ

妻が亡くなりました

残念な事に喉に餅を詰まらせて

賀状がこんな片便りとなりました

長い間の交情有りがとうございました

感謝申し上げます

と

金槌で頭を打たれた様に

目の前が真つ暗となり身じろぎもせず

ただ茫然と胸に葉書を握りしめた

その夜

誰にはばかり事なく泣いた

思いつきり泣いた

娘の時代から先生と慕い

青春を語らい愛を恋を語り

泣いて笑ったあの頃

和賀川の土手に腰を下ろし

白つめ草の花の中で人生を語り
自分を見つめ直した

あの日

そして結婚

姉の様に心配し

気配りをしてくれた先生

嫁いで間もなく

満開のりんご畑で

北上川の流れをながめ

初めて見るりんごの花を

先生が尋ねて来てくれた感激に

涙がこぼれてやまなかった

あの日あの頃が

遠く恋しく思い出すのです

あれから五十年

お互いの道を歩き続けて

七十路 八十路

今ようやく

今だから心から話せる

今だから心から話して置きたいと

思っていたのに

外は吹雪

風が笛を吹き荒れている

落とした涙が

深夜の灯に光った時

ふとあの頃の

先生の自転車を想い出した

涙が弾け銀輪を描いた

農村女性の憧れだった

農業生活改良普及員

漆原千代子先生

のどかな田園を自転車で

はつらつと笑顔で指導に廻って

くれた先生

この人生

先生が有っての今の自分です

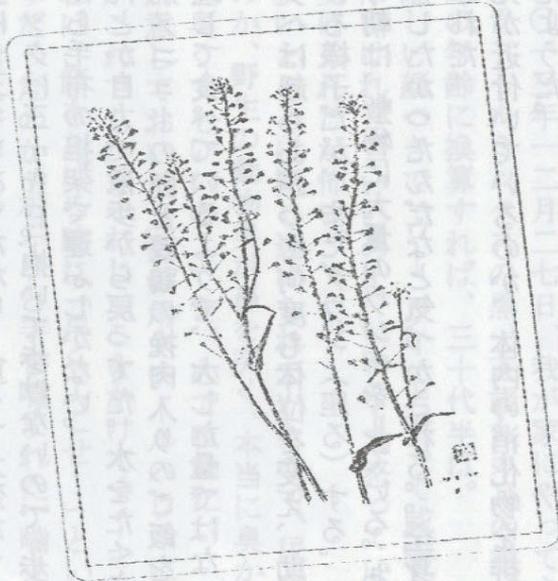
出逢えて有りがとう

出逢えた人生に

乾杯

平成二十三年一月二十日

大い



犬と暮らす

平氣三十三年一月二十日

千葉ちた江

二〇二〇年四月八日午後二時三十分、犬のロックが死んだ。

死が近付いても食欲はあった。

元気な頃は、台風でも、吹雪でも朝晩散歩した。

散歩用リードを持っていくと、何度も高くジャンプして喜んだ。

夫を力強く引つ張り、家の前の土手を一気に駆け登った。

今日も土手を登ろうとした。

何度も駆け登ろうとした。登れない。

残念そうに悲しそうに、夫と家の周りをまわって、平坦な道の児童公園付近を散歩する。歩けなくなっているのではないかと心配して迎えに行く。

前に飼っていた犬は、死に際にどこまでも歩きたがり、帰りは歩けなくなつて、夫と交代で抱いて戻つた。体重は十五キロあつたから、重くて大変だつた。

ロックは三十キロ。抱いて歩けないので、歩けなくなつたら毛布の担架で運ぶしかない。

何とか自力で散歩から戻つてた。水をたくさん飲み、特別メニューの卵と親鶏の挽肉入りのご飯を食べる。

無理して食べているようで、大した量ではない。

夕べは起ちあがつて何度も体位を変え、助けを求めている様子だが、またダウン（座る）する。

今朝は、敷物に大量のウンチをしている。ああ、ウンチをしたかつたんだなと気づかされる。全身がウンチまみれだ。

死が近付いているのか、体内の消化物を排泄したかつたようだ。

それでも、散歩に行きたいという。

玄関からようやく降り、よろよろ歩き出した。

ウンチを落としながら、足をプルプルプル震わせ、休みながら児童公園まで歩いた。おしっこもした。

どうかこうにかして戻ってこれたのだ。
もう、水も飲めない。食器に口をやるうとするだけだ。

何度もお湯を換えては、ウンチまみれの体を拭いてあげる。

スポイトで水を飲ませる。

倒れそうになりながら、自力で歩いて庭木の根元におしっこを掛ける。水便も出る。

静かに身体を拭いてあげ、スポイトで口元に水を入れてあげる。もう、飲めない。流れ落ちる。

昏睡に入った。
静かに息を止めた。

ロックは、虐待されて保護されていた犬だ。動物の保護をしている知人が案内した先は、とある貸し鉄工場だった。片隅の柵の中に入れられていた。

丁度「動物の命を守る会」のメンバーがパンを食べさせているところで、一斤をぺろりと食べた。

子犬や子猫は本当に可愛い。動物好きの人間様なら癒されるし、飼いたくなる。きつと元飼い主もラブラドルの子犬は可愛くて飼い始めたのだと思う。大きくなるにつれ、思うように飼えなくなつて虐待したのかもしれない。

人間のなす悲しき性の犠牲犬。

この犬と暮らすのは少し不安だったが、暮らしてみたいと思つた。

二〇一三年一月二七日、我が家にやってきた。

ラブラドルミックスの黒、五歳九カ月の雄。

人間の年齢に換算すれば、三十代半ば。

険しい顔つきで「ウー、ウー」と唸つて威嚇してくる。

怖いけれど、「いいのよ、いいのよ。怒っていいのよ」と受け入れたが怖い。

狭いところに閉じ込められていたので、尿なのか、糞なのか、野生の動物臭が鼻を突く。本当に臭かったけれど「臭くてもいいのよ」と、心で呟いた。

用意しておいた大型犬用スチールハウスに、これでもかこれでもかと、おしっこをかけてマーキングする。

私は、餌をあげる時に「早くよこせ！」という意味の怒りだったのか、がぶりと手を噛まれた。噛まれた穴が深くて出血が多い。

夫は病院に行くことを促すが、消毒を繰り返して、行かずに済んだ。この後にも三回噛まれた。

夫はとうとうと、リードを交換する際に逃げられてしまい、捕まえるのに四苦八苦した。

夫はとうとうと、リードを交換する際に逃げられてしまい、捕まえるのに四苦八苦した。

夫はとうとうと、リードを交換する際に逃げられてしまい、捕まえるのに四苦八苦した。

何しろ、人間は棒や金具で叩く怖い生きものと思っ
ているらしいから、齒をむき出して飛びかかろうとし
て来るのだ。

飼い始めて三年くらいまでは、うれしい時も「ウーウ
ー」、怒りの時も「ウーウー」と唸ってばかりで凄く臭
かった。

成犬だけど、子犬のようにボール遊びをしたり、タオ
ルを噛んで頭を振り振り引つ張りこをするようになる。
「おすわり!」「待て!」の命令に従ってご飯を食べる。

我が家は和賀川土手に向いて建っているので、土手
を散歩する犬には、激しく唸って吠える。縄張りを侵入
されたと思っているらしい。私たち夫婦には、半分気
を許している風だ。

時折、寂しそうな情けなそうな表情をする。
散歩ですれ違う犬には、力いっぱい飛び上がって向
かっていくから大変。私は両手でしっかりとリードを握
っても転びそうになり、足を踏ん張って耐える。遠くか
ら、散歩の犬がやってくるのを見かければ、大きく道を
それて岸辺を歩いて難を逃れる。

だんだんうれしい時の「ウーウー」の声が変わり、
甘える声になっていく。

なんとたって表情が笑って喜んでいる。これまでは、体
に触ると「何すんだ!」と怒って触らせなかったが、触
らせてくれるようになる。

少しずつ拭いてあげることができるようになる。
やがて、タオルとバケツを見ると、喜んで「早く拭い
て!」とせがむようになる。

「ウーウー」の唸り声がすっかり消え、「ワン、ワン」
と吠えるようになり、強烈な臭いが消えた。
散歩の犬と出会った時は、「気にしない!」と、言わ
れれば、知らんぷりして歩くこともできる。

夫婦にとっては、黒くて大きい犬の孫だ。
昨年の夏頃、頭を振り振りくしゃみをするようにな
る。夏が過ぎる頃には、一筋の鼻血を垂らしている。鼻
血の量が多い日もあり、下痢もする。

動物病院で診てもらい、止血剤と胃腸薬の投与が始ま
った。「盛岡の動物病院を紹介することができれば
ど、どうしますか?」と言われた。
体が弱っているし、車に乗ることになれていないの
で、様子を見ることにした。

冬至の頃には、鼻から、血の塊や粘膜のようなものが
出る。
投薬の効果が見えない。

戸外は寒くなった。

インターネットで室内用サークルを買い、玄関の中で飼い始めた。毎日、玄関の壁やサークルは、くしゃみで吹き飛ばされた血がたくさんつく。敷物には鼻から出た血がべっとりついて痛々しい。

暖かい日は、戸外で日光を浴びる。容態が悪くなるばかり。

知人が、吟味して飼育をしている卵を届けてくれる。出血が多いから、栄養のある卵と親鶏の挽肉の入ったご飯を食べさせる。

もう、我慢できない。動物病院を変える。

レントゲンの結果、「肺や胃腸は悪くなっていないですが、鼻の奥に腫瘍が出ています。手術のできない場所で深刻な状態です。」と、診断受けた。

朝晩、九錠の抗がん剤と止血剤と胃腸薬の投与が始まる。

投薬から一カ月と二十日ほどで死んだ。

身体をお湯で清めてあげ、前足、後ろ足を包帯で縛った。こうしないと、大型犬は火葬の炉に入らないのだ。孟犬が優しい顔で旅立った。

十二歳の暖かい春に。

よその犬を襲い、金銭でお詫びしたこともあった。大人になってから、子犬のようにボールで遊んだ。ご飯をせがまず、必ず散歩から戻って食べた。老夫婦を信頼して、言うことを聞いた。犬散歩の人達と知り合いになった。四季折々の自然にたっぷり浸れた。何よりも、徐々に弱っていつて最後まで生ききることを教えられた。

ありがとう ロック



なりわい
生業とは

高橋哲子

私達は一歳の息子を抱えて、いわくつきの廃屋に転居してきた。平屋の土間のあるがらんとした家で、玄関、茶の間、台所を改造した。向かいの大きな酪農家、斜め向かいの酪農家、建設業の三世代の農家、田んぼ奥に見える農家三戸、笹間から横川目に走る道路すぐ角の植木苗屋の農場の家、大工もする兼業農家、そして兄夫婦の農家が西に続いて一班、その仲間入りする

ことになった。地域民は、必ずこの道路を下がり藤根、北上へと用足しに出かける。往来の度にみんなは、どんな人が入居して来たかと不審に思いながら見ているようだった。そう、この家の元主は、土建業をしながら少しばかりの百姓をしていた。三人の子らは大学生の男子二人、高校生の女の子との暮らしの中で、「どんぶり勘定」のやり方なのか倒産し、挙句の果てに夜逃げしてしまったのだ。負債は親戚中に任せだが、切り崩しての兄たちは借金 of 工面を背負い、何とか関係者をも穏便に治めたようだ。その渦中の三番目の兄。下の方の弟二人、そしてバッチの夫も貧乏くじを引いた格好であり、ぼろ屋と三反五畝の田んぼは実家の兄から頂いたのである。

私は息子を中古車に同乗させて、実家の牛乳配達の仕事へ通う。夫は、藤根の六番目の兄の工場で仕事する。昔の鍛冶屋と農機具の修理屋から鉄骨建築の作業へと様変わりしてゆき、大変忙しく従事している。二人ともまだ若くもあり、精いっぱい働いた。

夜ともなれば、暗く静寂の中、田植え後間もなく聞こえる蛙の合唱、そしてピカッと光る蛍の数、子ども

たちは、すくった手の中の蛍を寢床の部屋に放した。蛍光灯を消すと、間もなくスウィツと光る蛍がいる。つらい時もあるが楽しかった。そして貧乏でもあった。私は子育てをしながら百姓をし、実家の仕事はやめた。母は孫が気にかかり、何度も遠く北上の町から訪ねて来る度に小遣い銭を置いてゆく、夕餉のおかずも差し入れてゆく。私はありがたく思いながらも心がざわつくのだった。

農業後継者のため、夫は、二番目の兄の子になり、二人とも養子縁組をする事がわたしの知らないうちに取り決められていた。あれ、なんとまあ・・・いずれあの二人の「死に水」は取るだろうと思っはいたのだが。

兄夫婦は、水稲が三町歩強、栗の栽培と新たにホップの栽培にも加わり、協同組合を立ち上げて十二戸で共同収穫し、ばあさんやらバイトまで雇うこと半月、臭いやらどす黒くなるやら、大型トラックを出すまでになった。それでも採算の取れない年もあり、二十年間、わたしたちも手伝う始末。義父はなぜか手間取りに出かけていた。義母は、農協の野菜選果場で働き、

その後は農産会社の従業員となつて励む。五十歳過ぎたあたり以後継ぎとして譲られた営農口座の残高はゼロに近く、新築した二人の家の固定資産税や、まだ残っている住宅金融公庫の返済と、二人の給料をも補填しながら農業にまい進していた。私はすぐ近くの後藤野工業団地内の厚和工業でパートのおばさんをして生活を支えた。全く知らない農作業はなぜか楽しかった。

私と同じく二世の奥さんたちは大体が会社勤めに通い、兼業農家が大半を占めていて専業農家はわずかだった。酪農は十二戸が経営していた。肉牛は一軒だけ、後はホルスタイン牛で朝晩搾乳した生乳は午前回収のミルク車でメーカーの工場に出荷され、雪印花巻工場に、近年は湯田乳業に収めているようだった。彼らの二世代の息子たちは、娘でさえ高卒後にファームステイしたり、海外研修してまでも技術を学んできて、親子経営に従事して頑張っているのを見てきた。

ちようど経済も上昇期か、乳価格良く、当然頭数も増やして設備投資もしたことだろう。しかし、なかなかうまくいかず、いつからか乳価は下落し、生乳はだ

ぶつき、そうこうしているうちに経営難に陥り離農する家も出てきたのである。

私は向かいの母さんと話し込もうと、牛舎を覗いてみるが、なんとも臭いのと、あまりに大きな体の牛が目の前に居るので、それ以上びくとも動けなくなったものだ。あの盛大な牛飼いの農家も娘さん夫婦は堅実な会社員生活になるために家族を伴い転居していった。もう二十年も前のことである。その間、酪農農家には堆肥舎設備の条例が作られたりして、資金繰りの厳しい所もあったようだ。次第にやめていく農家も増え、とうとう二戸だけが残った。

肉牛農家は稲作と共にやがて法人化して親子で経営に励み、全て自家生産物を使ったおいしい焼き肉店を開店している。小規模ながらも子取りの肥育農家も営んでいる。

実家の牛乳卸販売でさえ良い時もあった。子どもや学生たちの健康維持のための牛乳飲料推進の時代で、私が高校生の時だった。父は公的な所や、また高校生の昼食の支えとしてパンと牛乳を販売した。許可が得られた四校の昼時間にはそれぞれに配置されたパー

トのおばさんたちが短時間の中でバタバタと売りさばっていた。

もちろん私も牛乳を積み込むギリギリに出向き、二人して販売した。時々、生徒も手伝ってくれた。当然場所代的なもの、リベートは支払った。幼稚園、学校給食の栄養士さんにも大変よくしていただいた。従業員は黒工の定時制の学生さんらを雇い入れ、事務員二人と家族総出で仕事分担、販売先に走る。男の従業員も働いてもらうが、長くは続かなかつた。辛いしごとなのだろうか。隣には社長の家があり、その奥のアパートに定時制の学生が住んでいて、彼らはアルバイトで働いてくれた。

当時すぐそばに県立黒沢尻工業高校の学生寮があった。この高校の西側には横黒線の鉄道が走り、柳原駅の無人駅舎が今に至る。通勤の社会人、学生たちで賑わい潤っていた。北上線を利用する学生はだいぶ少なくなり、アパートが立ち並び、住宅化した地域は都市計画の変容とは裏腹に、なぜか寂しく感じるのだけは私だけだろうか。

父は青果市場の競売人だったので、早朝の野菜のせ

り売りをしてから十時ころに帰宅する。後年、地域の民生委員や区長をしながら七十歳で退職し、本業に復帰するも、息子に後を譲って経営を任せた。その後、病に伏して七十五歳で死去した。

時代の流れに苦慮した兄夫婦は、個人商店がスーパー化する中で売れ行きも倍増したが、その分、競争も激しくなる。メーカー（雪印）の二分化による販売店同士のせめぎあいには押され気味で、販路の拡大には至らなく、任された経営は老齢による体力低下や3K的なもの（きつい・きたない・きけん）、そして従業員不足が痛手となり、やがて四十七年余りの、老舗、「阿部才商店」から暖簾分けされて始めた牛乳屋は、母が八十九歳で死去した翌年に閉店した。

私は商売も楽しかった。さらに息子と同じ世代の社員たちと仕事したパートのおばちゃんとしても嬉しく働いた。二十二年間の会社勤め、総務課での清掃作業、昼食時の食堂での準備など、そして生産管理課や物流係での検品や雑務作業はわたしの性格に合っていて大いに学ぶことができたと思つた。

十年余りの義父母の介護生活も終えて、二人の老後

はやはり年金だけの経済生活では暮らせない。田畑の三町歩強の財産を回すようにしなければきつく、ご飯も楽しみも半減するかのよう思う。ずうっと続けてきたコメ作りもなかなかきつい。

いつになったら上手に儲かるのか。夫は、「俺も本格的に農業をしたい」と言う。彼は安心・安全を信条とする特裁米作りの「白ゆり稲作部会」に入り、減農薬、有機肥料の散布、バイオ肥料の透水など、関東の消費者に販路を拡大するやり方で、食味の旨い米づくりに二人して親身に取り組んできたつもりだ。

しかし自然には勝てない。冷夏の時の不作もあるし、60稲穂が出てから病虫害が発生することもたびたびある。いつの年も稗のおびただしい発生には心が折れる。除草剤をふれども、稗は勝つのである。一か月以上も田んぼに入り、腰をかがめた苗取り籠は、その青菜大の稗の重みで結び紐が腰に食い込む。まだ地固めされていない畝筋を一步、一步進む。よろめきながらもなかなか畔にたどり着けない私がいる。道路を行きかう人、農婦の友達には「俺の趣味だから」と豪語してみるのだけだ。

夏日には汗がだらだらと落ちる。水分補給の液体もぬるくなり、泥はねた服の見るも無残な我は、あと少し、あと少しと、終わりの無い仕事にもうクタクタ。ようやく疲れ切った体に終わりを告げる。

費やした時間のせいで、春に植えた野菜の苗たちも草に占領されてか、青虫たちの食事にされてか、はたまた水不足のせいも、「雨、降ったけかなあ」と思いながらのご無沙汰に、どれも見る影もなく、私はあきらめが良く、無いことにして、草たちを刈りこんで、わずかの実りだけを採る。「ごめん」と言いながら。申し訳ない話だ。

次は田んぼの畔の草丈が伸びたのが気にかかる。夫は老体なのか、朝晩の水見だけはきちんと管理しているようだが、なかなか腰は重い。去年はあまりの稗一面に見かねて一週間だけ腰をかがめて稗を取るが、腰痛と言っては終わりにして辞めた。そんなこんなで、コメは収穫が少なく、赤字決算なのだ。

「こんなことになってしまふんだ」諦めきれない自分がいる。「老後生活のどこのつまりがこのさまとは……いや、自分たちの仕業なのだ。もつとも義父母の

人生の六十年くらいは、いろいろなことをもやり遂げてきたようだ。

後藤野入植は、義父二十三歳頃か、下藤根の近所の美人な娘をもらい、掘立小屋ながら我が家を持つ。二人して分け与えられた土地での生活の始まり。義父は牛を飼い、牛乳をミルク缶で集積場に出す。桃づくりも試してみた。田んぼは、最初は共同作業で田植えをし、稲刈りまではみんな順序にこなしてきた。当時高校生の男子に手間賃の事務作業をしてもらった。日雇いしながらも徐々に自己改田した者は拡大圃場を持つようになった。

三十年後の記録史には、拡大した田んぼには昭和四十四年、人力二条植えの田植え機を入れ、四十五年には動力二条植えに変えたが、一般に普及したのは四十九年ころと記述されている。また、四十八年には育苗センターが建設され、近隣内の育苗の生産に影響し、発展に寄与したとも書かれている。

義父は、私が初めて見た時は、三町歩の田んぼに手押しハンドル作業で田植えしていたが、転入した五十六年の次の年には乗用の田植え機に買い替えている。

夫婦ふたりの作業を見て助けていたのだ。専業の酪農家は改田しなかったようである。義父の家にも、平成五年の二度目の住居新築のその日まで、ブロック塀の木枠のガラス窓の付いた、山高帽のような屋根の小さな牛舎痕が建っていた。サイロは、当然無いのだった。

後藤野開拓三十周年記念（祭）の記録から

（昭和五十三年記載）

一、低地力が生産増進阻害の壁である。緑肥の研究実験も行われたが、やはり家畜を導入するのが本命、当初の目標として耕馬一、乳牛五頭、子牛収容のマンサード式牛舎が導入された。これより前の二十七年、初めて乳牛が導入されて小型サイロを造ったのが第一号で、トンガリ帽子の見たこともないサイロが話題になったものだ。集約酪農地域に指定され、雪印乳業の工場誘致も実現し、悠々、酪農ブームの時代を迎えた。

一、後藤野地区の酪農家は概ね三タイプに分類できる。
①専業農家は十戸。耕地面積は四町歩強、十五〜二十

頭飼養。飼料畑が一頭当たり二十反歩と少ない。粗飼料の調達方法が大きな問題。②複合農家は十六戸。耕地面積も大きく、水田化率は六、七割。飼料畑も若干所有しているが、稲作の労働と飼料生産確保が問題。③育成農家は七戸。耕地面積が小さく、水田化率は九割。稲作収穫面積三町歩につき水田依存が極めて強い。搾乳部門を排除し育成部門を残すが、粗飼料生産基盤につき困難。

湯田ダム完成と同時に改田された稲作へと転向の機運がきた。特にバラクーラ導入とタンクローリーの集乳を機に酪農と分かれた人たちも多い。乳質の格差発生、とも記録されている。

しかし、生き残りをかけてはみたものの、搾乳した乳は生乳のだぶつきでやむなく廃棄。乳価の下落、設備投資や環境問題の強化による堆肥処理施設の建設など、経営は厳しいものだろうか。

ここ二十年来、経営難のつけなのか、数戸が閉業、いいえ、牛飼いを辞めてしまうのをわたしは見てきた。もちろん後継者問題はいよいよで、頭数は増やしたも

の、労働力と体力勝負のギリギリまできている。そんな友だちの奥さんは七十歳の現役で酪農の仕事にピリオドを打った。花卉栽培に転換してみたり、特産物のアスパラ栽培と稲作を拡大して成経する農家、兼業の暮らしからサラリーマン経済生活に切り替えた家、さらには離農して転出する家もあった。

親世代からの仕事は、時代と共に、やはり私どもはじめ、給料取りとの兼業農家へと変貌してきたようだ。近年は急用の時や計画的休暇の時に助け作業をしてくれるヘルパー制度ができ、一時の休息が得られて、酪農家もイキイキと暮らせるようにはなってきた。そして今日もわたしは十時ころに小屋のシャッターを開けながら、我が家の田んぼの農免道路を三反田8枚先の友だちの牛舎に向けてミルクカーが往來しているのを見ている。あと一軒、もつと北東にある牛舎に向かっているのだ。全部で四十七軒、みなさん、私の友達である。

一、旧和賀町は昭和五十四年ころ、減反問題が強化される中、契約栽培と言う特典も考えてホップ作りが推

奨され、江刺ホップ農協を通じて申請された後、栽培が始まった。

義父はホップ栽培も手掛けた。六反田の減反地にポールを建てて番線を張り、何列も苗木の株を植えこみやがて伸びたツルを絡めてホップの棚を作った。八月の盆過ぎの収穫までは何度も作業工程がある。防風ネットも張る。ホップ生産協同組合も組織して、収穫期二週間の共同作業はハラハラ騒がしい。台風で棚が見事に波打って倒れることも何件かあった。キリンビールとの契約栽培、乾燥した花は何百キロ販売できたのだろうか。私たち夫婦も土日の休みには作業の手伝いをするしかないのだ。スコップ、鎌、摘花鉋と毎週、道具を持ち替えては作業する。二十年目の最後の年、収穫して乾燥した品物を出荷し、販売先へ。ところが返却された。残留農薬が起因したのか、何が原因なのか？徒労に終わる。

花巻税務署から「脱税しているのではないか」との通知が来る。夫はいいやいや税務署に出向く。舅の仕事の後始末。ホップの販売収入は赤字だ。現場を知らな

い公務員に対し、「机上仕事で給料をもらっている者とはわけが違うんだ！」と捨て台詞。周りの相談者は哑然としていたと、夫は息巻いて帰って来る。そして六反田は牧草畑に転換し、あの酪農家への賃貸地となる。

稲作Ⅱ水田の作業は朝晩の水管理は夫が欠かさず、畦の草刈りや病虫害防除の薬剤散布は休みの土日に合わせて行い、できるだけ吟味して体でこなして仕事。秋の稲刈り前には栽培栗も実り、仮払い機械で刈った広大な草地にはどれほどの栗粒が落ちていようがなからうが、毎日せつせと拾いに行く。姑、家族も良い栗が拾えるように励む。これも栗生産部会を組織して農協からの出荷販売に努めるが、必然的に退部して栽培を放棄する家もある。我が家でも今では倒木と枯れ木の荒れ野原になっていて、熊だつて入って来れないかもしれない。いや彼らの餌には事欠かないだろう！懸命に手入れをした栗畑から収穫した栗をあつ銘菓の会社に販売し、確実に収益を出している家も一軒だけある。

旧和賀町の特産、野菜は数々あるが、維持し継続し

てゆくのは大変な事だろう！近くの稲作農家は十年來二世の代になり、兼業から集落営農化に合わせて、委託された土地の耕作、ハウスもの野菜、椎茸の栽培、育苗、そして小型化穀物の乾燥施設を建設して専業農家に切り替えた。今は株式会社になっている。

とは言え、私どもは楽百姓に成りすまし、当初から地元の機械化銀行に、委託耕作をしていて、トラクタも持ち合わせず、籾乾燥だつて法人や農協に頼っている。そして彼の所に依頼し、すべて段取りは任せ放題だ。

私は独断する。去年は稗に悩まされた挙句、赤字の経営。二度目には強い除草剤の散布依頼を決断。夫の意向を確認する。そうして見栄は良くなつてきたけれど、果たして収穫は増すのか。あの信条を覆すことになりはしないか。次の世代にバトンタッチする時に、「よし」とできるのだろうか。安心、安全の上を目指しと言われる米作りに移行できるのだろうか。迷うところではある。

自然との共生、自然との関わりにおいて、高齢者の

「蟻の兵隊」の映画を観て

泉王将軍

児玉 智江

「このまま死んでは死にきれない！」上官の命令で、蟻のように黙々と戦った」のだ。

奥村和一（80歳）は第2次世界大戦後も中国に残留し、中国の内戦を戦わされた。当時戦犯だった軍司令官が責任追及の恐れから残留を画策したにもかかわらず、日本政府は兵士たちが勝手に戦争をつづけたとみなし、黙殺するのだ。

奥村和一は事実の証拠を見つげに中国へ行く。命令

に従ってではあるが人を一人殺した事も悔やまれて死んでも死に切れない。

政府が事実だと解つても、本当と言えないというの
はおかしいではないか。事実がはっきりしたなら、それは認めるべきであり、事実を嘘にしてしまうのは今生きている皆の責任になるのではないか。最高裁に上告したが、却下された。絶対おかしい。

私の父は海軍軍人であった。父は潜水艦の機関長であり、敵艦に突入した。蟻の兵隊の映画を観て思った。読書会では会員が8人位は出席していた。あなたの父は軍人を志願しての戦死だから、戦争を進めた側だから娘のあんたが「あやまれ」といわれた事がどうしてもオーバーラップしてしまう。もう14年も前の事である。戦争の聞き書きの文集を作る会の席での事であった。私は「父が戦死した時は3歳であり、父へ軍人になるように頼んだ訳ではないから、謝らない」と返答した。その場を即刻立ち去った記憶がある。「坊主憎けりや袈裟まで憎い」と中国で終戦を経験して来た年配の女会員が言った。「ふふう」と笑った人もいた。終戦を生きて来た私には、理解が出来ない事が多い。

だから、その頃生きてきた人達の多くの声を聞かねばならないのだ。私の今の理解度では、父も蟻の兵隊と同じであり、戦争に行かなかった女達も蟻の兵隊と同じ立場なのだ。そのうち、父の声が聞こえて来るにちがいない。(2007・7・31 記)

お盆

児玉智江

坪一間半位の真ん中に小さい石が置いてある

それが父母の墓で 石には何も刻んでいない

戦死した父の遺骨はないが魂が眠っている

母の骨は父の魂の側で眠っている

花を飾り お供えをして 手を合わせ

墓参りをする

戦争して平和が来るはずがない

他国を滅ぼし幸せがやって来るはずがない

あの日から今もズーと

戦死したみんなは語り合っている

戦争で関わって死んだ人達皆が語り合っている

(詩・2020・8・15記)

伊藤京助翁の墓

千葉ちた江

小春日和の十二月五日、夫の運転で、故郷の石巻方面に向かった。事前に調べておいた、石巻市鹿又字町浦94番地 曹洞宗「光明寺」を訪ねた。

山門は、ピカピカで新しい。東日本大震災で倒壊したため、檀家の寄付で再建立されたと掲示されてある。山門脇には、かつての村長伊藤泰治郎や地域貢献者を讃える古い石碑が建っている。

墓地に入るとすぐさま、伊藤家の墓の石塔が眼に入る。四間四方位の真ん中に、鍵付きの骨堂入口の上に一

段と高い石塔に「伊藤家の墓」と刻まれてある。石塔中心に同じサイズの長方形の墓碑が14軒分立っている。どの墓碑もみな、伊藤家の墓である。伊藤家の墓地の入り口に目当ての伊藤京助翁の墓があった。

空心無一居士 伊藤京助翁墓

お墓には杉山元治郎（農民運動家・政治家。大阪の生まれ。クリスチャンとなり、東北地方で伝道活動に従事。大正11年（1922）賀川豊彦らと日本農民組合を結成。昭和7年（1932）以後、衆議院議員・日本農民組合長・労働農民党中央委員長）の碑文が刻まれている。

私の母、大正5（1916）年生まれ、76歳で死亡の長兄の伊藤栄助、明治38（1905）年生まれが九二歳で亡くなった平成9（1997）年の葬儀を思い起こしている。母の弟や喪主の従兄弟たちが話していたことは、「ずつつ（方言 爺さんのこと）は、『伊藤京助は大叔父で、この家の人だ。おっきな石碑が目立ぶず、鹿又の古い時代の人達には知られている人だ。農民の

ために沢山活躍した人で、自慢は自慢さ。んだげどあまり自慢はしたぐね。』と、苦労したことなどを語りでぐながった風だった」と、話していたのを、ぼんやりと思ひ出す。

母の生家の伊藤家の墓を探す。中央の石塔から右脇三番目、初代は宝曆(1751~1764)とある。左隣の墓には承応(1652~1655)とある。

母の生家の事、母の生い立ちを調べてみたいと思っていたが、母の生きた人生程の年齢になって漸く始めたのである。

きつかけは、九月に大門正克先生が来舎した折に、和賀のおなごたちの生き方、生き様をつづる暮らしなどの話をして、ふと、「自分は宮城の石巻の出身で母の実家のおじさんという人が、小作の運動家だったと聞いています。」と語ったことだった。

日本近現代史の専門学者の大門先生は、「地名を昔の呼び名で言ってみて」と話された。「その地域、仙北平野は最も多くの小作運動があったところです。」と教えてくれた。

母・藤京助翁の墓

数日後、『宮城懸農民運動史 中村吉治編』日本評論社をインターネットで購入。

驚いたことに、表紙を開くと伊藤京助翁の墓と、杉山元治郎からの碑文の写真が大きく載っている。一三一〇ページを少しずつ読んでいる最中である。

戸籍を調べると、伊藤京助は、伊藤直助の長男、勝助嘉永6年(1854)生まれの弟で、万延2年(1861)生まれである。勝助の長男、文助 明治16年(1883)生まれは、母の父である。

明治末期の東北の農民運動は、先進地と同様な地主制に対する自然発生、大衆的な広がりがあった。宮城県仙北平野・山形県庄内地方・同じく村山地方と、東北の表と裏を代表する稲作地帯に拡大している。鹿又村の日農支部が宮城県下唯一の農民組合であった頃は、本格的農民運動展開の過渡的な性格で小作農民のおおらかさがみられた初期の運動にあたる。このころの農民運動は自小作農民の諸要求を掲げ小作人同盟会の名称で、指導層は地主的自作上層、地方政治家とある。この影響で、県当局・地主が稲作改良の対策を確立し、地主会、農会の組織を通じて稲作生産力の発展が本格化とある。鹿又村でも水害・凶作があり、稲

作生産力の展開は低く農民経営の小商品生産者としての成長は制約されていたが、大正期には、経営改善で克服しようとする農民の努力で商品生産者としての成長がみられたとある。明治期から大正期には地主の土地所有規模に大きな変動があり、伊藤泰治郎家は一一・四町歩から一・二町歩へ、小野寺弁治家は一〇・九町歩から五町歩以下と没落。高橋友四郎も八・三町歩から一町歩へと没落。一方、土地を三倍、五倍へと拡大集積する家もあり。

村長に就任した伊藤泰治郎、小野寺弁治、高橋友四郎の一〇町歩内外の中堅地主層が没落していく。没落とともに農会活動を軽視する地主層のやり方にも大きな批判がでて、革新派は郡役所の書記で村民の信望の厚かった人を村長にたてる。

このような中、かつての村長伊藤泰治郎は、早稲田大学専門部の卒業生で、学生時代から大正デモクラシーの思想家であった宮城県古川出身の吉野作造や内ヶ崎作三郎らの思想的影響を受けていて、農民組合の組織化ということを教えられ、同じ新鹿又部落(新田町)の同家小作人伊藤京助にすすめて農民組合の組織に着手。伊藤泰治郎は隣村の大地主に債務を持ち、同じ地主から圧迫される小作人に深く同情。

伊藤京助も、明治41年には、水田一反七畝二七歩、畑一反三畝一八歩、宅地六〇八坪を所有する自小作農。研究心旺盛で頭脳もよく働き、明治41(1908)年の桃生・牡鹿連合小作人同盟会結成には、積極的に参加、寄付している。大正12(1923)年、伊藤京助は、鹿又村の農民たちに働きかけ、日本農民組合鹿又支部を二〇〇余名で組織化。伊藤泰治郎を支部長、伊藤京助副支部長、光明寺で設立総会。秋には、大地主に対し、小作料引き下げの運動展開。翌年は、(イ)減石運動、(ロ)耕地整理の促進、(ハ)産業組合の設立の目標を掲げて運動展開。

四月になっても、隣村前谷地の巨大地主で高利貸資本家の齋藤家は小作料の引き下げを聞き入れなかった。農民組合の一部は小作放棄を決定して水田二町歩は、六月になっても無仕付け。光明寺の住職が齋藤家に交渉し、二町歩の水田を無償で借り受け、檀家に一人を要請して田植えを試みたが、思うように協力得られず、二反歩のみの田植えであった。交渉の結果、齋藤家も耕作放棄の田に対しても、ただは大正12年度一割引きの条件を認めたとある。農民運動史には、事細かく記載。

農民組合の創設者であり、優れた指導者であった伊藤京助は、大正14（1925・5・26）年、六四歳で病死。

この後、組合の統率力が弱体化し、大正15年以降、宮城郡・登米郡豊里村・桃生郡桃生村・大谷地村と農民組合運動が発展した後は、これら組合と連帯した闘いへと展開していく。

最初に結成した鹿又支部の影響は、仙北平野を中心として広汎な宮城県下農民運動発展の基礎となり、重要な役割をしたと。

農民運動史には一文も載っていない伊藤京助本家（母の生家）の事は、母から一部を聞いている。

母の父親、文助は、京助の借金の保証人になっていたから、当時の五町歩以上の田んぼが全部なくなってしまうと。

母の姉・兄・弟・妹・自身もそれぞれに、ねいや（お手伝いさん）付きで育ったが、母は家が破産した一〇歳（大正15年）の時、よその家のねいやをしたと言う。父親は、祖父の勝助に隠れてハンコを押したことを悔いて精神を患い、うつ病になってしまつて……。

祖父は、二階の部屋の窓を杭や板で囲いをつけ、座敷牢にして父親の面倒を見たそうだ。

来る日も来る日も、皆に見られないように家族総出で太陽が昇る前に田圃へ行つて野良仕事、夕方は暗くなつてから野良仕事が続いたと言う。ほとんど、伊藤家親戚に農地を買つてもらい、作付けは自分たちで続けたそうだ。働けど働けど、貧乏だったと。

家の実権者は祖父で、正月は、ろうそくの灯でみんなで祖父の読む百人一首をしたことを懐かしそうに話す。農作業の手配も祖父がしていたと。家事も祖父が采配して、食事の栄養バランスをとるようにと、諭していたのだそうだ。

母が半分泣き泣き話すのは、自分だけ一人、上の学校に入れてもらえなかった、兄弟姉妹みんなはそれぞれに入学させてもらえたと言う。祖父は貧乏な暮らしの中でも、教育を重んずる考えがあったのだと思う。しかし、祖父に母親が亡くなり、大家族のご飯支度をする者がいなくなつたから家事をするように言われ、高等学校へ入れられなかったという。学校の先生に進められて隠れて試験を受け、郡から移管の県立石巻女学校に合格したが許されなかったという。代わりに、近くの裁縫学校へ通わせてくれたと言う。

生家の思い出話をするときは、「自分の母親は、一五歳の時に亡くなった。夜、廁へ行き流産して、庭に倒れたまま寒さで死んでしまっていたのを朝にわかったのさ。母親がいなくて辛かった。あんたは、こうして私がいるから幸せなんだよ。」と口癖に語ったもんだ。

母亡き後、遺物整理をしていた長姉は、合格通知書が遺書のように残されていたと語る。どんなにか町の女学校に入学したかったことか。そういえば、母は脳梗塞の夫の介護を二三年間したのだが、八年間も老人大学に通い、皆勤賞をもらっている。勉強はためになると呟いていた。

母の姉のカウさん、明治43（1910）年産まれは、女学校卒業して、産婆と保母の資格を取って、東京市職員の保母として働き、破産した生家に送金していた。妹たちの結婚支度の着物や帯を買って送ったりもしていた。

この伯母さんは一〇四歳（2014年）で亡くなったから、話を聞く機会があった。「伯父さんは、東京に来た時は会いに来てくれるの。人力車に乗ってきてね、ひげが立派でね、格好いいおじさんできりつとしていた人だった」という。

当時の農民組合は、組合費を徴収せず、寄付も募らないから身銭で行き来していたのだと思う。自小作農民は金もないから、借金だったと思う。伊藤京助没後、京助の借金を肩代わりしたのは、母の生家の家族、女たち、同家の作男の労働と言いい尽くせぬ苦労だったと思う。

戸籍に、母の祖父勝助の三男伊藤誠助、明治23（1890）年生まれは、三六歳で静岡県浜松市へ分家届け出、大正15年5月3日（1926）除籍とある。伊藤京助が病死後間もなく、鹿又村を出たようである。今もって、調べようがない母親の叔父である。

2021年1月20日



姑の關係
小平さ
うって大
だんだよ
を聞いて
然々と
入ったよ

七千人の軍事郵便

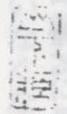
帰らぬ夫

石ころに語る母たち

岩影木陰に秋海棠

血の涙を落す

山下正彦



小平玲子さんを偲んで

意思の貫き方

高橋つか子

今年の四月二十一日、佐藤恵美さんから、小平玲子さんの訃報の知らせがありました。三日前に小平さんから、麗ら舎読書会の葉書を頂いたばかりだったので、なかなか信じられませんでした。

葉書には、りんご畑にお花がいっぱい咲いて蝶とミツバチが飛びかい楽園のような絵でした。添え書きに小学二年生だった娘さんの絵とありましたね。太い根で逞しく育っているりんごの

木から元気をもらいました。

小平さんはじめ編集委員のみなさんの力で立派に出来上がった「別冊、おなじみ36号」。小平さんが寄せている「ハル子さんのこと」を読んでいると、やさしさと耐えてきた強さが伝わってきました。

十数年会社の仕事をして、遠く北海道から岩手のりんご農家に嫁ぎ、慣れるまで大変だったことでしょう。それにご主人が早く亡くなり、苦労が続いたことと思います。

ハル子さん（お姑さん）と二人暮らしのことを書いていましたね。暗い話をするハル子さんに、楽しかったことや懐かしい思い出を聞いてあげて良かったですね。苦痛の時間を黙々と働いてきたハル子さんの心に、光が射し込んだように感じました。どこの場でも話し合うって大切ですよ。

私も兼業農家に嫁ぎましたから、嫁姑の関係が身にしてみえます。次の読書会には、小平さんと「今の農家の嫁について」、話し合いたいな

あ、と書いていました。本当に残念でなりません。今日も別冊おなご、「ハル子さんのこと」を読んでいます。

小平さんの思いやり、温かさがいっぱい詰まっています。

小平玲子さん、今まで本当にありがとうございました。

平ご冥福を心からお祈りいたします。

今年四月二十

合掌

血の涙高橋

山下正秀

小平玲子さんの思い出

いふ一今の出来の... 大の... 小平... 楽... 苦... 二人... 10.2.22



小平玲子さんに学ぶ

意思の貫き方

田村和子

北海道江別市出身の玲子さんは三十三歳の時に水沢でりんご園を営む小平範男さんと結婚しました。二人とも強い関心を持っていた宮澤賢治が縁結びだったと聞いていますし、玲子さんが範男さんの書いた文章に魅かれ、押しかけ女房になったとも聞いています。その夫が病死し、二人の娘たちが進学、就職で家を離れ、その後義父も亡くなると、玲子さんは義母と二人だけの生活になりました。

玲子さんが小平りんご園の一員になった時、彼女は義母から「仲良くしましうね」と言われました。そんな義母の思いに玲子さんは異存はなかったものの複雑な心境だった、と『おなご36号』に寄稿した一文で述懐しています。その文章のタイトルは『ハル子さんのこと』。義母の呼称に“さん”をつけたことで、麗ら舎読書会の会員の中からは様々な意見が上がったのは当然のことでした。身内の呼称に“さん”は付けないのが慣例なので。ところが玲子さんは“さん”を付けることにこだわり、周囲の声に違和感を示しました。わたしは今でもその時の玲子さんの困惑気味ながら、きっぱりと示した強い意思の顔を思い出します。

義母と二人だけの生活が始まると、夕食後にそれまでほとんどなかった様々な会話を交わすようになりました。玲子さんは義母から暗く辛かった昔の話だけではなく、心に秘めていた陽の当たる明るい話をも徐々に引き出し、同性として共感さえ覚えるようになったと言います。そんな義母を表現する呼称は“義母”でも“ハル子”でもなく、“ハル子さん”でなければな

らなかつたのでしよう。そこには分別をわきまえる年齢になつてから暮らしを共にするようになったおなご同士の間に存在したある種のディスタンスが関係していたのではないでしようか。その一方で、二人だけで会話を重ねる中で生まれた人生の先輩に対する共感と尊敬に近い思いもあつたのではないでしようか。いずれにしても最終的に『ハル子さんのこと』としておなごに載せた玲子さんの強い思いにわたしは拍手を送りたいのです。

思い起すと、玲子さんは熟考した末に達した自分の思いに忠実な人でした。高校卒業後、北海道だけではなく全国的にも一目置かれていた新聞社の正社員になり、経済的にも同僚にもめぐまれました。ところがその後彼女はそこを退職し、次の目標に向かって自分探しを始めたのです。その時の話が出た時に、わたしはすかさず聞き返したものです。経済的に自立を失つてしまう不安はなかつたのか、と。彼女は答えました。たとえアルバイトをしながらだつて、何とか食べていく自信はあつた、と。

玲子さんの意思の強さにはその後も何度か驚かされたものです。数年前、彼女はひどい回転性めまいに襲われ、救急車で病院に運ばれました。幸いにも一過性のめまいで、大事にはいたりませんでした。ところが、日常的に高血圧であることは判明しました。ところが通院して薬を飲んだのはそのときだけ。「わたしは病院には行かないし、薬も飲まない。何かあつてもそれは自己責任なのだから」と言い放つたのです。

二〇二〇年四月二十日、玲子さんは突然倒れ、旅立ってしまった。その一週間ほど前、彼女は我が家にやって来て、パソコンのウインドウズ・テンへのバージョンアップを終えたこと、別冊『おなご』を続けることに意義を感じていること、次号に実母のことを書くため、資料集めを始めたことなどを明るく元気に語ってくれました。帰りがけには、挿し木してみると言つて我が家の庭にあるポーランドりんごの枝を数本持つて帰りました。少しずつ縮小はしながらも、りんご栽培への情熱を失つてはいませんでした。

かけがえのない友人を失い、わたしは未だに戸惑っています。周囲を悲しませるような自己責任は間違っている、強い意思を持って忠告できなかったことをわたしは今も悔やんでいます。



りんご畑に花が咲いている様子を小学2年生だった娘が描きました。…というコメントつきで、事務局の仕事がされていた小平玲子さんから「麗ら舎読書会総会」延期のがきが2020年4月17日消印で会員に届きました。その後まもなく亡くられました。

ひびと
囲炉裏

秋の日暮れは早い

父も母も田んぼに出て

帰らない

刈った稲束を

はせに掛けているのだ

職場から帰って

せめておつゆでも

作っておこうと

大きな囲炉裏ひびとに

大きな鍋を掛ける

小原麗子



コロナウイルス感染症の収束が見えず、マスク姿で、36号合評会を行い、10月は「千三忌」墓参ができて一安心。忘年会・おなご正月は取り止めになりました。岩手日報の黒田論説員から働き掛けがあり、「#MeToo」運動やフラワーデモが広がり、性被害撲滅へ意識共有を図ろうと、県内の女性世代間トーク「ミニコミから#MeTooへ」企画に、「麗ら舎読書会」が参加。コロナ禍で事前収録し、オンライン交流となりました。

原稿は、遠く滋賀県の松本さんが寄せてくれました。

元美さんが、松本さんの原稿をワードで打ってくれましたが、送信しても未送信になるからといって、DVDで送ってくれました。

田村さんは、翻訳の仕事の合間にワードを打ってくれました。

哲子さんは、麗ら舎との連絡係を務めてくれました

た。小原麗子さん・渡邊満子さん・佐藤恵美さんが、校正をしてくれました。

麗子さんは、「あら、いっぱい原稿集まったんでない！いいごこだ！」と喜んでいました。

表紙は兒玉智江さんが凍とした中にやさしさがほとばしる女性の絵を描いてくれました。

ガリ版刷りから始まり、以前は外注編集発行していましたが、三年前から編集委員会発行に切り替わりました。

新しいことに向き合い、おなごたちの生き様を語り、記録する冊子を継続発行することができ安堵しています。

夫には、雪かきをして駐車係してもらいました。パソコン操作があまりできない私は、みなさんに助けられて漸く発行です。感謝申し上げます。

(千葉ちた江)

社団法人、業の会での活動が活発化してきています。

田村和子、藤原の士等の会合でリーダーを伴って、V.D.の会に入っています。

また、活動して、活動が活発化してきています。D.の会に入っています。藤原の士等の会合でリーダーを伴って、V.D.の会に入っています。

藤原の士、藤原の士等の会合でリーダーを伴って、V.D.の会に入っています。

藤原の士、藤原の士等の会合でリーダーを伴って、V.D.の会に入っています。

藤原の士、藤原の士等の会合でリーダーを伴って、V.D.の会に入っています。

藤原の士、藤原の士等の会合でリーダーを伴って、V.D.の会に入っています。

藤原の士、藤原の士等の会合でリーダーを伴って、V.D.の会に入っています。

藤原の士、藤原の士等の会合でリーダーを伴って、V.D.の会に入っています。

編集委員

主宰・小原麗子

編集委員長・千葉ちた江

編集委員・渡邊満子

編集委員・佐藤恵美

(事務局)

編集委員・田村和子

編集委員・相川元美

編集委員・高橋哲子

(会計)

別冊・おなじみ 37号

発行日 二〇二二年二月二十八日

発行者 麗ら舎読書会

発行所 岩手県北上市和賀町長沼5-343-3

TEL・FAX 0197・73・6673

